

修士論文

中学校における「コンテイナー機能」の必要性
— 吹奏楽部顧問の視点から —

三重大学大学院教育学研究科
教科教育専攻 音楽教育専修

206M026 竹内 一史

2008年2月13日

目 次

序 章	4
第1節 研究の目的	4
第2節 論文の構成	6
第1章 中学校における“母子相互関係”の応用	7
第1節 基本的信頼 — basic trust	8
第1項 赤ん坊と“基本的信頼”	8
第2項 中学生と“基本的信頼”	9
第2節 情動調律 — affect attunement	11
第1項 母親の無意識的な能力	11
第2項 中学生と情動調律	12
第3節 容器（コンテイナー） — container	14
第2章 生徒と中学校（教師）の関係性	17
第1節 荒れる学校・荒れる生徒	17
第2節 生徒たちと対峙することから学ぶもの	18
第3節 学校（教師）の役割	19
第4節 コンテイナーとしての学校（教師）	20
第5節 中学校をコンテイナーとして機能させるためのアイデア	23
第1項 安心して「うんち」のできる学校	23
第2項 全生徒の「今」を把握するために	24
第3章 「音楽」と人との関係性	28
第1節 中学生と音楽	28
第1項 授業で歌わない生徒たち	28
第2項 同質の原理	30
第3項 「場」の空気	31
第2節 「音楽」の持つ力	33
第3節 「音楽」と「コンテイナー機能」	35

第4章 吹奏楽部顧問の視点から	37
第1節 橋南中学校吹奏楽部の現状.....	37
第2節 音楽指導における情動調律.....	38
第3節 目標設定と部員の居心地の関係.....	42
第4節 吹奏楽部とコンテナー.....	54
終章 ～成果と課題～	56
終わりに	58
資料	59
(1) 橋南中学校吹奏楽部のコンクール参加の記録 (1997～)	59
(2) 6月9日アンケートの生徒のコメント	60
(3) 7月1日アンケートの生徒のコメント	63
(4) 9月23日アンケートの生徒のコメント	65
補遺 コンクール参加の教育的意義	68
参考文献	71

序 章

第1節 研究の目的

イギリスの精神分析家 Wilfred Bion¹はその著書『Learning from Experience²』（1962）の中で、生まれたばかりの赤ん坊の中にある苦痛（空腹感・身体の痛み・不快感など）を contained（内容）と呼び、母親の乳房を口に含むことを通して母親の体という container（容器、コンテナ）に投影する（吐き出す）ことで、母親はその苦痛をコンテナに入れて処理して、安心に変えて赤ん坊に返してやるという考えを示している。このような母親と赤ん坊の相互作用の関係性を「コンテナ機能（アルファ機能）」と呼び、現在すでに心理臨床の領域では、臨床実践を行う上での基本理念のひとつとして周知されているところである。

筆者は、中学校教師として20年の実践の中で、担任として、音楽教師として、吹奏楽部の顧問として、また生徒指導担当として、様々な場面で試行錯誤しながら、多くの生徒たちと関わってきた。その経験を通して筆者は、この Bion の「コンテナ機能」の概念が、中学校でのあらゆる指導の中で有効に機能することを直観的に感じてきた。

昨今、中学校においては様々な理由によって引き起こる、非行や問題行動・学校への適応障害などの問題が指摘される。生徒たちは、それぞれに悩みやストレスを抱えて学校にやってくる。そして、家庭内では発散しきれなかった（または家庭内で蓄積された）その悩みやストレスを、学校に来てぶついたり吐き出そうとしたりする。そのとき、母親が赤ん坊に乳房を含ませて安心を与えるのと同じように、学校・教師が生徒の悩みやストレスを一旦受け入れ、そして個々に応じた様々な形で安心に変えて生徒に返していく。中学校が生徒にとってこのような場所であったならば、赤ん坊が母親を求めると同じように、生徒も中学校を求めてかけがえのない場所だと感じることはできるのではないだろうか。そしてこのときの生徒と学校（教師）の間の相互作用の関係性がうまく機能しているとき、それは Bion の言う「コンテナ機能」の概念とまさしく一致すると言えるのではないだろうか。

一方、筆者は音楽の授業や吹奏楽部の指導の中で、日々生徒たちに教えている「音楽」そのものの中に、コンテナとしての力が備わっていることを実感している。人は音楽を聴いたり、または演奏したりする中で、心が安らいで癒やされたり、元気が出て頑張る

¹ ビオン、ウィルフレッド Wilfred Bion. (1897-1979) クライン派精神分析家。メラニー・クラインの分析を受けたクライン派第2世代。精神分裂病（統合失調症）や境界精神病の分析に取り組み、斬新な考えを著す。今日ではビオンの考えを抜きにはクライン派精神分析理論は成り立たない。（松本邦裕著「対象関係論を学ぶ」より参照）

² 『経験から学ぶこと』（「精神分析の方法Ⅰ」より）福本修訳 法政大学出版局（1999）

うという気持ちになったりする。音楽の授業で、大きな声でみんながそろって気持ちよく歌えた時や、吹奏楽のコンクール等で満足のいく演奏が出来たとき、何かしらその時の生徒の表情に安らぎと充実感を感じる。人が音楽にふれたときに、その音楽に心を浸し、ゆだねることで、逆にその音楽から安らぎやエネルギーを与えられる。人と音楽との間には、赤ん坊と母親の間にあるのと同じ、相互作用の関係性を見ることが出来る。このとき、言い換えれば人は皆赤ん坊で、音楽は母親であり乳房となり得る。

筆者は、学校吹奏楽の活動の目的には大きな二つの柱があると考えている。ひとつは、生徒たちがクラブという集団の中で様々な困難にぶつかりながらも、人間的に成長していくということ。そしてもうひとつは、楽器演奏を通して音楽表現の力を身につけ高めていくことで、生徒一人一人が音楽そのものを楽しむことである。そして、この二つの目的を達成するために共通して大変重要な要素となるのが、この「コンテナ機能」の概念であると筆者は考えている。

筆者のこれまでの教師経験の中で問題を抱える生徒と出会うたび、乳幼児期に両親(特に母親)からの適切で十分な愛情を享受していないことが原因だろうと考えられる場面に、実に何度も直面してきた。少年犯罪が報道されるたびに、学校での道徳教育の充実を強調すべきという声が聞かれる。そして、音楽科等の芸術科目の授業時間数は削減される一方である。しかし、彼らに本当に必要なのは果たしてそのようなものだろうか。机上で知識として教え込まれる規範ではなく、一人の人間として、包まれて、愛されて、守られているという“安心感”こそが、彼らに心の余裕を与え、彼ら自身を甘えの心から自立させる原動力になるのではないだろうか。そして、それを手助けするために大きな力になる「中学校教育」、そしてその中で扱われる「音楽」というものの存在をもっと重要視していく必要があるのではないだろうか。

このような現状から、本稿では、Bionの「コンテナ機能」という概念が、精神分析や心理療法の世界だけではなく、ごく一般的な日常の学校教育(音楽教育)の中においても応用されていくべきだということを論じていきたい。そして、様々な問題や悩みを抱えた中学生を適切に指導していくために、学校教師が日々の関わりの中でこの「コンテナ機能」の概念を念頭に置いて実践していくことで大きな効果をあげることを明らかにしていきたい。それらのことを、筆者のこれまでの教育実践の中から一人の中学校教師、音楽科教師、吹奏楽部顧問としての活動を振り返りながら分析していく。さらに具体的実践例として、筆者の今年度の吹奏楽部指導の様子を挙げて、中学校における「コンテナ機能」の応用の実際を省察する。

第2節 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では、母子相互関係において「コンテナ」としての機能を果たすために必要ないくつかの要素を挙げ、それぞれの要素が赤ん坊に対してと同様、中学校現場でも必要不可欠であることを述べていく。

第2章では、筆者の教師経験の中から、特に学校が荒れていた時代の指導の実際を振り返り、中学校（教師）が生徒にとって「コンテナ」として機能することの必要性と、そのために必要な教師の考え方、その実践の中から生まれたいくつかのアイデアを論じていく。

第3章では、筆者が音楽科教師として教育実践してきた経験から、「音楽」そのものの中に「コンテナ」としての力があることと、それを十分に活用するためにはどのような「空間」作りが必要であるのかを考察し、音楽教育における「コンテナ機能」の活用の仕方について論じていく。

第4章では、第1～第3章で述べてきた概念を念頭に置いた指導の実践例として、筆者の今年度の吹奏楽部顧問としての指導例を挙げて、教師が教育現場で「コンテナ機能」の概念を活用することの効果を検証していく。

第1章 中学校における“母子相互関係”の応用

音楽療法士の松山久美は、音楽療法を行う際に、セラピストが母子相互関係の視点を持つことの可能性について述べている³。本来母子相互関係は、精神医学や発達心理の領域のものであるが、それを音楽療法という臨床に応用することの意義について論じている松山は、その中で具体的な母子観察の観点として次の5つを挙げている (pp.19-21)。

- i) ターンテークングと母性的機能
- ii) 興奮やわずかながらスリルを伴う遊び
- iii) 情動調律 — **affect attunement**
- iv) 包容 — **containment**
- v) 抱えること — **holding**

そして、これらの視点をもとにした音楽療法セッションの症例を挙げ、母子の関係を観察し、考察整理していくことから、母子相互関係における前言語的世界でのコミュニケーションが、前（非）言語的介入とも言える音楽療法を考えていく際に、指針の一つになりうると述べている。

この松山の視点は、筆者のこれまでの教育活動において、経験的に身につけて指導の際に応用している「暗黙的な知」と類似している。また、中学校という教育現場で生徒指導をする上で筆者が原点として考えている姿勢や視点と共通する部分が多い。

もちろん、生徒指導は音楽療法とは根本的に目的が異なる。しかし、大人と子どもの境目で肉体的にも精神的にも不安定な思春期をむかえる中学生を様々な場面で指導するという面において、音楽療法を行う場合と共通する大切な視点があると考えられる。すなわち、松山が音楽療法に母子相互関係を応用しているように、中学校教育に母子相互関係を応用してその効用を見出そうとするのが筆者の目的である。

この章では、中学校教育において教師、または学校が様々な生徒指導を行う上で、どのようなことを指導の原点として捉えていかなければならないかを確認するために、教育とその隣接領域との関連を考察する。特に、乳児に対する母親（養育者）の関わり方や母子相互関係の望ましい状態において重要な要素を抽出し、それを中学校における指導の原点として応用するという松山と同じ手法で論を進める。つまり、松山が精神医学の概念を音楽療法という現場に応用した同じ手続きで、それを中学校の教育現場に応用しようとするものである。以下に、筆者自身のこれまでの教育実践を俎上に乗せながら、母子相互関係における概念を教育現場に適用して述べていく。

³ 松山久美:「音楽療法における母子相互関係の臨床的応用」(日本臨床心理研究所発行「音楽療法」第8号別刷、1998年)

第1節 基本的信頼 — basic trust

第1項 乳幼児と“基本的信頼”

今日では臨床心理の領域で、思春期の児童・生徒の抱える問題の多くが、乳幼児期の発達課題に起因していることを疑う研究者はいない。

筆者は、これまでの教育実践の中で非行や問題行動、学校への不適応などを起こす生徒たちを数多く見てきたが、指導の過程でそれぞれの乳幼児期の環境を知るにつれ、子どもの成長にとってこの段階の重要性を身にしみて感じてきた。

Erikson (1902–1994) は自身の「ライフサイクル論」の中で、人の成長の課程を8段階に分け、そのうち第1段階の乳児期(0歳から1歳半頃まで)の発達課題を、“基本的信頼感”対“基本的不信感”という対の概念で表し、不信感に勝る信頼感が持てたとき、この時期の課題は達成されるとした⁴。

“基本的信頼”とは、乳児が自分の世話をしてくれる母親、または養育者に対して、抱っこや授乳、おむつ交換や語りかけなどにより無意識的に、この世は安心・信頼できるいいところで、自分は大切にされていると感じるような信頼感のことである。赤ん坊は日々の母親との関わりの中で、空腹感やおむつが汚れて不快を感じたときなどに、母親がタイミング良くやってきてその不快感を取り除いてくれる心地よい経験と、泣いて叫んでも振り向いてもらえずその欲求に答えてもらえない経験を幾度となく繰り返す。その積み重ねの結果、振り向いて不快感を取り除いてもらえる安心をより多く経験した赤ん坊は、母親に対して“基本的信頼”を持つことができる。この時期にこの基本的信頼を獲得した赤ん坊は、将来人を信頼する子どもに成長することができる。ところが、泣いて叫んでも振り向いてもらえず放置・放任される経験ばかりを多く体験した赤ん坊は、基本的信頼を獲得できずに、人に対して不信感や敵意を抱くような子どもになってしまう恐れがある。ここで重要なことは、そのような体験の量ではなく、質である。前述した松山の5つの要因がこの段階で相互に関連しあっていることが重要なのである。

言うまでもなく、乳児にとってこの“基本的信頼”を獲得することは、その人格を形成していく上でも、発達的な視点でも重要な心の土台となるものであるといえる。にもかかわらずその大切な乳児期を、望ましい質的な関わりを受けずに過ごした子どもの多くは、思春期を迎える中学生の時代になってその弊害が非行や問題行動、学校や対人関係の不適応となって一気に表出する。

そのような生徒が増加してきている昨今、中学校教育の中ではそれぞれの生徒に対して適切な指導をしていくことが必要となってきた。そして、そのような生徒たちの問題に学校や教師が充分に対応しきれなくなったとき、生徒は学校や教師に不信感を抱き反発

⁴ 『ライフサイクルの臨床心理学』馬場禮子・永井徹共編 培風館(1997) pp.7-8

し、その結果学校が荒れてくることもある。

第2項 中学生と“基本的信頼”

そのような学校の「荒れ」を筆者自身もこれまで何度か経験してきたが、それはどのような原因で起こったのだろう。社会背景や世代が原因であっても、生徒にとっても教師にとっても苦しく辛い日々を再び繰り返さないためには、学校や教師は、何について合意形成をする必要があるのだろうか。

それまで平穏だった学校や生徒がなぜ荒れた状態になってしまったのか、そのような「荒れ」を防ぐにはどうすればよいのか、その答えを見つけられない限り、いつかまた再び同じ状態に戻ってしまうに違いない。

生徒の「荒れ」を振り返るとき、安心して他人を信じるという経験を、保護者にも家庭にも、残念ながら教師や学校に対してもしたことがないのではないかと思われる生徒の様子を見た。「自分は愛されていない、つらいことがあっても誰も自分を助けてはくれない。だからオレはオレ自身の力で自分を守る。周りのすべてはオレを攻撃する敵だ」とばかり、驚くほど誰に対しても心を許さない生徒を目の当たりにした。

そしてそのとき筆者は、教師として自分はこの子たちに何ができるのだろうとずいぶん頭を悩ませた。人に対する不信感から暴力的・攻撃的になってしまっている生徒に、教師として充分に対応しきれず無力感に押しつぶされそうになりながらも悩み考え試行錯誤した中から、以下のことを念頭に置いて生徒に接するよう心がけた。

- 1, その生徒が攻撃的な態度でこちらに向かって暴言を吐いてきても、たとえ胸ぐらをつかまれても、とことんその生徒とかかわること。絶対に後ろを向かないこと。
- 2, 「お前がなんと言おうと、壁を殴ろうと、あかんことはあかんのや」と間違いをあいまいにせず正面からぶつかること。
- 3, そのかわり、彼がしたほんの小さな良い行い（「ごめんなさい」をきちんと言えた等）を見逃さず、さりりと「がんばったな、えらいやん。」と褒めること。

それでも、生まれてから10年以上もの間、誰に対しても十分な“基本的信頼”を獲得し得なかったのではないかとさえ思われるそのような子どもたちからは、そう簡単に信頼を得ることはできなかった。しかし直観的に、彼らの“閉ざされ乾いた心”を潤すためには「ここにひとり信頼してもいいやつがいた」と思ってもらえるようになりたいという願いがあった。生徒にはそれぞれの生活世界があり、それは生徒にとってたとえ不都合があっても子どもにはどうしようもない問題もある。しかし、いかなる理由であれ、乳児期に十分な“基本的信頼感”を獲得できないまま中学校に通っているのならば、筆者自身が“ひとりの人間”として「この世は安心・信頼できるいいところ、自分は大切にされている」とほんの少しでも思えるよう接していくことが重要であると考えた。

また、Erikson のライフサイクル論では「思春期」は不安と自信の間で揺れ動きながら自己の“アイデンティティ”を確立する重要な時期とされている。先述のように特に表面的な問題を抱えた生徒に限らず、どのような生徒もこの時期はそれぞれに日々の生活の中で困ったこと、いやなこと、悲しいこと、つらいことや不安なことを心の中に抱えている。それを家庭内や友人関係の中でうまく吐き出して処理できれば良いのだが、それがうまくいかずにもがき苦しんでいる場合もたくさんある。中学校教師として教育に関わるからには、勉強を教えることはもちろん大事なことであるが、それと同時に、筆者はそのような心の問題を生徒が安心してぶつけることのできる教師を目指さなければならないと考えている。生徒たちはいつも、安心して心の中の不安や悩みをぶつけることのできる“基本的信頼”を持てる相手や場所を探している。

先に、冒頭で示した松山の視点と筆者の関わり方に類似点があると述べた。

例えば、

- 1, その生徒が攻撃的な態度でこちらに向かって暴言を吐いてきても、たとえ胸倉をつかまれても、とことんその生徒とかかわること。絶対に後ろを向かないこと。
- 2, 「お前がなんと言おうと、壁を殴ろうと、あかんことはあかんのや」と間違いをあいまいにせず正面からぶつかること。

以上 2 点は、松山の示した「i) ターンテイクングと母性的機能」や「ii) 興奮やわずかながらスリルを伴う遊び」における母性や養育者の態度と同じではないかと考える。

ここで論議しなければならないことは、「母性的機能」という響きと一見正反対な荒っぽい筆者の関わり方には、同じ構造があるということである。

乳児と母親の関係が促進されるのは、主として乳児が不快な状況にある場合である。つまり、「何かしらの要求がある」「誰かに解決してほしい」しかし、「うまく伝えられない」という状況が、母親や養育者を「聞き手」「読み手」という立場に布置させるのである。

また、乳児の反応を読み取りながら母親がそれに答えるという場面で重要なのは、性差ではなく、相手が投げかけるエネルギーと同じレベルで返す、ということである。したがって筆者は、男性であっても、子を持つ経験のない若い教師でも、母性的な機能を発揮できると考え、論を展開したい。

それでは、生徒がそのような“基本的信頼”を獲得し、閉ざされ、渴いた心を開き潤すためには、教師として具体的にどのように関わればよいのだろう。筆者はそれについて最も重要なのは

- 3, そのかわり、彼がしたほんの小さな良い行い（「ごめんなさい」をきちんと言えた等）を見逃さず、さらりと「がんばったな、えらいやん。」と褒めること。
というタイミングだと考える。それについて次節で述べる。

第2節 情動調律 — affect attunement

第1項 母親の無自覚な能力

ニューヨーク生まれの精神分析家 Stern (1934-) は母と乳幼児の情緒交流のパターンの一つである“情動調律⁵”に注目し、母-乳幼児治療の分野の研究を深めている。この“情動調律”について岩倉政城⁶が実例を伴って以下のように説明している。

泣いている園児を抱き上げた保育士さんが、右の手のひらで肩をリズムカルにトントントンと叩き続けて泣き止むのを待つ。泣きが収まってしゃくりあげる頃になると叩くリズムがトーン、トーンと緩やかになる。やっと機嫌が戻って眠くなると、「ど～ら、眠くなったの、お膝でねんねしていいよ～」と語り、叩くリズムがいよいよ緩んで、それでもトォ～ン、トォ～ンと続ける。端から観ていると肩を叩くリズムが三段階にギャチェンジしているのがわかる。実は子どもに語りかけていた声の調子まで、終わりの頃にはやや低く、静かに語りかけて、これもギャチェンジしている。誰に教えられたわけでもないのに自分で半ば無意識にやっているこの能力のことをスターンは「情動調律」と名づけた。これができると泣いている子どもの気分に合わせて最適のリズムで背中を叩き、そのスピードを自在に変えることができる。(筆者要約)

情動調律とは英語で“affect attune”と表記される。“attune”はラジオのチューナーと同じように、赤ん坊の情動に、母親が自分の気分を“同調”させる能力のことである。

つまり、情動調律とは母親が赤ん坊のそのときの気分を読み取り、母親自身がそれに同調して接しながら、徐々に安定した気分へと導く作業である。この例に見られるように、母親の繊細な語りかけや仕草の変化により、赤ん坊も自分の情動的状态を母親の変化に対応させていき、母子の情動が一体となりそれを両者が共有する。岩倉が例に挙げているように赤ん坊が眠くて泣いているとき、母親が優しく語りかけスキンシップしながら眠りに誘うことで赤ん坊はそれを心地よく感じ、安心して眠りにつくことができる。

ところが、どんな母親もいつも気分良く赤ん坊の相手をできるとは限らない。育児や家事に疲れると、母親は精神的に不安定になり、イライラすることもあるだろうし、体調を壊してしまうこともあるだろう。赤ん坊がお腹をすかして泣いていても、兄や姉の世話で忙しいときもあるだろう。しかしどのような時でも赤ん坊は、母親の精神的な状態(情動)

⁵ Stern, Daaniel N. 精神分析家、発達心理学者。現在コーネル大学の心理学教授。「親-乳幼児心理療法：母性のコンステレーション／馬場禮子、青木紀久代訳 岩崎学術出版社 2000。(原書名：The motherhood constellation：a unified of parent-infant psychotherapy)」

⁶ 五感ではぐくむ子どものこころ 岩倉政城 かもがわ出版 (2006) pp.67-68

をそのまま受け止めてしまう。お腹をすかせておっぱいがほしくて泣いているのにそばに来てくれなかったり、本来信頼すべき母親から「さっきあげたばかりでしょうが」といらだった言葉を聞かせられたりというネガティブな経験が続いた結果、赤ん坊は自分の情動を母親に理解されないと感じ、その欲求は安心に変えられないまま満たされずに不信感と残ってしまう。

また、そのようなネガティブな経験が積み重なると、赤ん坊は意図を持って人とやりとりをすることに対してあきらめてしまう。あるいは、違う方法で気を引こうとして、気持ちとは裏腹の行動をとることがある。大好きな母親に対してわざと母親が困るような行動をして気を引こうとする、いわゆる「いやいやゲーム」などがその代表例である。

そしてこのような母子間のやりとりの積み重ねによって赤ん坊は、自分に対して欲求を満たしてくれるやさしい母親と、泣いているのに自分を放置・放任する悪い母親の両方を体験する。そうやって、瞬間瞬間の母親の表情や反応を読み取ることを通して、満たされたり満たされなかったりする経験を繰り返す。そして、満たされない経験より満たされた経験をより深く体験した赤ん坊は、母親に対して“基本的信頼感”を持つことにつながる。そしてその母親への基本的信頼感が、将来「人」に対する信頼感となってその子どもに定着していく。

このように、“情動調律”を通した乳幼児期の赤ん坊に対する母親や養育者の働きかけが、その子の将来の人格形成にとって大変重要な意味を持つのである。

さて、それではこのような“情動調律”という母親とのやりとりが人の成長にとって重要なのは、赤ん坊の時期だけのものなのだろうか。赤ん坊の時期に十分な安心を得られるだけの情動調律を体験しなかった子どもは、中学生ではもう手遅れなのだろうか。

第2項 中学生と情動調律

中学生ともなれば、身体はすでに大人と同じくらいにまで成長する生徒も出てくる。入学時にはまだ幼かった子どもも、3年間で見違えるように大きく成長する時期である。しかし、問題行動を引き起こし指導の困難な生徒が暴れて騒いだりしているとき、その行動の様子はまるで幼児が欲求を満たされずに泣きわめいているのと同じように見えることがある。そのようなときは、小学生でも簡単に理解できるような当たり前の理屈を話しても聞き入れようとはせずに、ただ自分の欲求だけを主張する。場合によっては、周囲の物や人に対して攻撃的になる場合もある。筆者の経験ではそのように生徒が暴れ始めたとき、周囲の物や人に危害を加えないようにその生徒を抱きしめて押さえながら興奮や怒りの対象者から遠ざけつつ、その生徒に負けないくらいの声の大きさと激しさで、落ち着くよう話しかけて興奮を冷ますように働きかけた。興奮している生徒に対してこちらの言葉を受容させるために、生徒の声に負けないくらいの叫び声に近い声で語りかけるのだが、そのよ

うな教師の激しい口調に対して、最初は教師が自分に危害を加えてくると勘違いして抵抗しさらに暴れようとするこゝもよくある。しかし、そうでないことがわかると次第に抵抗する力を緩めはじめ、少しずつ興奮も収まってくる。それに合わせて教師の方も話しかける声を次第に和らげていき、とにかく冷静に話ができる状態にまで落ち着かせる。長い時間をかけてようやくそのような状態になったとき、「落ち着いたらもう一度最初から話してごらん」と生徒の目を見て全力で思いを聞き取り、「なるほどな。それは確かに腹が立つな。」と共感しながら生徒の情動に合わせる。その上で、「でもな、いくら腹が立っても暴力はあかんやろ？」と言って今度は逆にその生徒の共感を求める。「どうすれば一番いいのか一緒に考えようか」と解決の方法を冷静に考えさせる。

このようなやり方で、やっとの事で生徒の気持ちを落ち着かせて指導ができたことがいったい何十回あったらう。身体が大きく力の強い生徒は、男性教師が数人で対応しなければならないようなことも少なくなかったが、このように対応することで泣きわめきながらも生徒は興奮を収め、少しずつ冷静になることができるのだった。

これはほんの一例であるが、しかし、このような教師の働きかけは、泣きわめく赤ん坊に「よ～しよし」と母親が語りかけ、背中をトントンとリズムカルにたたき続けて泣きやむのを待つ前述の岩倉の説明にあった母親の赤ん坊に対する働きかけと酷似していることに気づく。つまり、興奮して暴れる生徒に対して、教師が同ジエネルギーで生徒の情動に同調し、徐々に落ち着きを取り戻させて冷静な状態へ導く作業は、母親が泣いている赤ん坊を抱き上げて語りかけながら、徐々に穏やかな口調で眠りに誘う作業と同じ構造を持っているといえる。

そしてその結果、生徒が落ち着きを取り戻し、素直に自分を見つめ反省する事ができたとしたら、母子間における“情動調律”の働きと同じであると考えることが出来るのではないだろうか。このことから、母子間における情動調律の基本的概念は、赤ん坊の時期だけでなく中学生の心に対しても十分に機能し、そのことを教師が充分認識していれば生徒の指導に有効に活用できると筆者は考えている。

これまで、中学校における様々な指導で生徒が“基本的信頼”を得るために“情動調律”の概念をもとに教師として生徒と向き合っていくことが必要だということを述べてきた。それでは、実際の学校現場でそのような教育活動を行うためには、学校という「場」は生徒やそこで実践を展開する教師にとって、どのような「空間」になればよいのだろうか。そして、その「空間」では、生徒と教師の間でどのような関係性が成り立てばよいのだろうか。松山が音楽療法に援用したように、筆者も教育現場で適用するために、「iv) 包容—containment」「v) 抱えること—holding」という概念について次節で概観する。

第3節 容器（コンテイナー） — Container

赤ん坊が空腹感やおむつの汚れなどの不快を感じて泣いているとき、それを察知した母親がおむつをきれいに取替えて、赤ん坊に乳房を含ませてゴクゴクと母乳を飲みながら、赤ん坊は空腹感を満たす。そのとき赤ん坊は、それまで自分の中にあった不快感が一掃されたと感じることが出来る。このような母親と赤ん坊の関係性を、精神分析家の Bion は、その著書「Learning from experience⁷⁾」の中で詳しく分析している。この Bion の考えを、松本邦裕の説明⁸⁾を引用して整理してみる。（下線は筆者による）

生まれ出た赤ん坊はやがて、飢え、身体の痛み、不快感などといった苦痛を体験します。ここではその苦痛の中から「飢え」を取り上げます。

その苦痛はだんだん強烈なものとなっていく、赤ん坊には、耐えられない、自分自身がそれによって壊れてバラバラになってしまうと感じられます。そこで、赤ん坊は自分の中からそのわからない苦痛／恐怖を体外へと排出してしまうことで、その不安から逃れようとし、赤ん坊には心の中の不安は、排泄できる具体物として体験されているのです。自分の内にある破壊的な悪い対象（A）なのです。赤ん坊は手足をばたつかせ、激しく泣き叫び、ものとしての苦痛の放散を試みます。

その恐怖に圧倒されている赤ん坊のそばに母親が居ます。母親は赤ん坊の苦痛から恐怖に陥っている様子に気がつきます。そして、それから、母親はこの赤ん坊がおなかをすかして泣きわめいていることを適切にも理解していきます。その理解に基づいて、次には、母親は赤ん坊を抱き上げ、あやしながら、みずからの乳首を含ませます。赤ん坊がミルクを飲むことで自分の中の苦痛は和らいでいくのですが、それは赤ん坊自身には母親への苦痛の排出がうまくいったこととして体験されるのです。ここで母親は、赤ん坊が排出した苦痛／恐怖を母親自身の中に包み込んでいます（B）。このようにして、赤ん坊が排出した不安／悪いものは母親の中に滞在することが許されるのです。

母親のこれらの対応で、破局的な苦痛にまで高まっていた赤ん坊の欲求不満、それは「飢え」でしたが、それが充たされ、赤ん坊はその恐怖を癒やされます。すなわち、母親の中に投げ入れられ、留め置かれていた赤ん坊の不安は赤ん坊に持ちこたえられるほどのものとなって、適切なきに赤ん坊に戻されるのです。悪い対象は消滅し、よい対象が出現します。（筆者要約）

この中で、赤ん坊が感じる飢え、身体の痛み、不快感などといった苦痛／恐怖（下線部 A）を Bion は「contained（コンテインド：内容）」と呼び、赤ん坊が乳房を含み、ミルクを飲

7 「経験から学ぶこと（1962）」福本修訳 法政大学出版局（1999）

8 「対象関係論を学ぶ クライン派精神分析入門」松本邦裕著 岩崎学術出版社（1996）
pp.23-25

むことでその苦痛／恐怖を包み込み、安心に変えて返してくれるとした。下線部 (B) のようにその包み込むもの、つまり母親そのものを「container (コンテナ：容器)」と呼んだ⁹。そして、母親が果たすこのような機能のことを“コンテナ機能”と呼ぶ。

岩倉政城はその時の母子関係を下図のように表し説明している¹⁰。

図：乳児の苦痛の排出とコンテナ役割をしている母のもの思い (Bion : 岩倉描画)



お腹がすいたときに空っぽの腸がミミズのように動く蠕動運動は「ガッツペイン (gut pain)」というはらわたの痛みを伴う。しかし赤ん坊は腸の痛みの原因が空腹によるものだと理解できず、外からきた痛みという得体の知れない物体ととらえ、それを体外に排出しようと泣いて手足をばたつかせて追い払おうとする。そのとき、それを適切に察知した母親が「よしよし」とやさしく抱き上げ、乳房を含ませる。赤ん坊はゴクゴクとミルクを吸い取ることで、はらわたの痛みはウソのように消え去る。このことで、赤ん坊はさきほどまで自分の中にあったあの痛みという得体の知らない物体を、乳房を通して母親というゴミ箱、すなわちコンテナに吐き出したと感じる。そして母親はそのコンテナの中で苦痛を安心という赤ん坊にとって心地よい物体に変えて返してやる。(筆者要約)

図の表題にある「もの思い (reverie)」とは、母親が赤ん坊を愛する原動力となるような母親の精神状態のことで、赤ん坊に対してこのような愛情あふれる営みをするのは理屈で

⁹ 「経験から学ぶこと (1962)」 福本修 法政大学出版局 (1999) p.106

¹⁰ 「五感ではぐくむ子どものこころ」 岩倉政城 かもがわ出版 (2006) p.86 図V-2 より一部改変

はなく、いわば母親に元来備わっている本能のようなものと言える。「もの思い」について松本邦裕は同著の中で、「子守唄をなにげなく口ずさみながら乳房を与え、赤ん坊をやさしくあやしているお母さんを思い起こさせます」と述べている。

Bion 自身は同著「*Learning from experience*」における分析の中で、苦痛や恐怖のような内容を「ベータ元素」と呼び、それを母親に投影することでその内容が「アルファ元素」という安心に修正されて再び赤ん坊に返されるという考えから、母親のこの機能を“アルファ機能¹¹”と定義している。

ここまで、赤ん坊が自分の中にある苦痛や恐怖を、母親というコンテイナーに吐き出し、そのコンテイナーの中で母親が安心に修正して赤ん坊に返されるという機能について述べてきた。

Bion の分析はそれだけにとどまらず、そのような繰り返しの経験により赤ん坊は、修正された安心だけでなく、その母親の持つ「修正する機能」そのものも自分の中に取り入れ、いずれは自分自身の中に“自分専用のコンテイナー”を作り上げ、自分の力で苦痛や不安を修正し、苦痛に耐えることのできる強さを獲得すると考察している。そして、母親への絶対的な依存から徐々に分離し、いずれ個として独立していくことができるのである。

さて、筆者がこれまでの教育実践で生徒と向き合ってきた中で、おぼろげながら直観的に大切だと感じて実践の原点としてきたことが、Bion の“コンテイナー機能”の概念と出会うことではっきりと具体的なものになってきた。つまり、Bion の分析による母親と赤ん坊の関係性を、中学校における教師（または学校）と生徒との関係に置き換えて応用して様々な生徒指導の中で活かしていけるのではないかということである。そしてこのような機能の効用を十分に認識することができれば、女性である母親だけではなく男性教師や子どもを持った経験のない若い教師でもその力を発揮することができると考えている。

次章ではこの考えをもとに、中学校または教師は生徒との間にどのような関係性を持つべきなのかということについて論述していく。

¹¹ 「経験から学ぶこと（1962）」福本修訳 法政大学出版局（1999）pp.13-15

第2章 生徒と中学校(教師)の関係性

第1節 荒れる学校・荒れる生徒

筆者が現在の中学校に赴任してから数年経った頃から、いわゆる生徒の激しい「荒れ」が学校を襲った。具体的な様子を以下に述べる。

1年生の1学期の英語の中間テスト中、机の上に堂々と教科書を開き始めたので、驚いて指導すると、「なんであかんの？」と平気な顔で尋ねてきた。また別のテスト中には、なにかカチャカチャ音がするなど思っていたら、急にその子の机の中から炎と煙が上がってきた。プリント類が燃え始めたのである。机の中でライターに火をつけて遊んでいたらしい。そのような出来事から始まり、また別の日には授業中に他のクラスの生徒がガムをかみながら勝手に入ってきて、その生徒の胸ポケットにはタバコとライターが見えている。教室を出るように言うと「うるせー」の一言だけで出て行こうとはしない。仲のよい生徒の机の横に座り込み、携帯電話を出して着信音や音楽を大きな音で鳴らす。その子を抱き抱えるようにして力づくで教室から出そうとすると、こちらの胸ぐらをつかんで蹴りを入れてくる。このような出来事も日常茶飯事であった。体育や美術・音楽などの教室移動の授業の時には必ずと言っていいほど、そのクラスの子のカバンから財布がなくなる。全員にアンケートなどをとって訊いてみると、あるひとりの生徒が浮かんでくるが、本人に問い詰めても「知らない」の一点張り、さらに追求すると「証拠あるんか！」と逆ギレしてくる。盗まれた本人は悲しそうな目をして見ているし、クラスのその他大勢はたぶんあいづだなど思いながらも、仕返しが怖くてそれを言葉にすることはできない。家庭訪問で様子を保護者に伝えると、担任教師に向かって「この子がやっていないって言うんやからやってないんや。お前はうちの子を疑うんか！」という父親の回答。また、休み時間には蛍光灯のスイッチから始まり、壁、天井、ほうきや傘立ての傘、ガラス、掃除道具入れのドア、便器など学校内のありとあらゆるものが壊される。職員の車のナンバープレートは曲げられ、エンブレムは外される。このような頭を抱えたくなるような事件が一日に何件も起こっていた。

教師の方はそのために、本来クラブ指導や教材研究をすべき放課後に、その日起こった事件の整理と指導と家庭訪問で走り回り、気がついたら11時や12時になることも珍しくなかった。また今日もクラブの指導にいけなかったなあと思いながら、家に帰って放課後できなかった教材研究やテストの採点等を明け方までこなすという日々の連続であった。このまま世の中が終わっていくのではないかと思うほど、精神的にも肉体的にも全ての職員がぼろぼろになっていた。それでもまた、次の日はやってくる。そんな生徒たちでも昼間は学校以外に行くところはなく、毎日決まって10時頃になるとやってくる。頑張って笑

顔で「おはよう！」と声をかけると「死ね！」と返事が返ってくる。授業のない空き時間の教師は、一時間中廊下に待機しており、教室へ入らない生徒の相手をする。授業妨害だけはさせないという最低限の線を守るため、授業の空きの教師が職員室で次の授業の準備やテストの採点など到底できるような状況ではなかった。授業のある時間は天国、空き時間は地獄という感覚であった。

このように、放課後のクラブ活動どころか、教科の授業さえまともに進めることができないような状況の中で、ナイフのように尖った心を持つ子どもたちと正面からぶつかってきた。生まれてから10年とちょっとしか経たない子どもから「お前」と呼ばれ、胸倉をつかまれ、大人として、人間としてのプライドをズタズタにされながらも、生徒に対して「お前がどれだけ暴れようが間違いは間違いだ」「暴力で正しいことを曲げる事はできない」と言い続けた。毎晩毎晩深夜まで続く家庭訪問の中で、この子達の心をこのようにしてしまった原因はどこにあるのか？この子達は自分に何を求めている？教師として今自分はこの子のために何ができる？というようなことを考え続けた。校内の校務分掌で生徒指導代表(主任)を任されたりする中で、「音楽」や「吹奏楽」の指導以前に子どもたちを「人間として」指導するに当たって本当に大切なものは何か、また、それには教師としてどのような気持ちで子どもたちと接していけばよいのかということ、さらには、子どもたちにとってどのような教師が信頼でき、心を開いて自分のことを語ろうと思えるのかというようなことを、毎日毎日考えさせられた。

第2節 生徒たちと向き合うことから学ぶもの

このような現実の中、自分にぶつかってくる生徒から以下のようないくつかの事を教えられた。

1. 生徒が100人いれば、100通りの生活と価値観がある

当たり前のことではあるが、人は皆育った環境が違う。家族の構成も違えば、あらゆる物事に対する価値観もその家庭ごとに様々である。教師になるような人というのは、その中で限られたほんの一部の人たちであるのだ。教師になる人は、その多くが中学、高校とそれなりに勉強もついていけて、大学に入るだけの経済力がある家庭に育ち、すくすくと成長させてもらえた人たちが多くと思われる。しかし、実際に教師として多くの子どもたちと接してそれぞれの家庭の様子まで見えてくるようになると、自分の育った家庭環境は決して当たり前ではなかったことに気づく。様々な事情で子どものために三度の食事もまともに準備されない家庭が想像以上の割合であることや、学校での集金をすぐに払うことが困難な家庭がたくさんあることや、三人ともみんな父親がちがうと

というような兄弟姉妹があること。母子家庭で母親が仕事に行っている間、クラブも勉強もできずに赤ちゃんの面倒を見なくてはいけない中学生がいること、また、「茶髪は他人に迷惑をかけてないから悪くない。だからピアスも自分が開けてやった。」と悪びれることなく言い切る親がいることなど、例を挙げればきりがないほどそれまでの自分の常識では考えられない各家庭の世界があることを知った。

2, 授業中はなぜ立ち歩いたらいけないのか本当にわからない生徒がいること

「なんであかんの？」と生徒に訊かれたらどう答えればよいのだろうか。「勉強しているみんなの迷惑になるから」といえば、「自分は勉強なんかしたくないもん」と教室を出て行く。追いかけて「授業をきちんと受けられないようでは高校に行けなくなってしまふぞ。」という、「高校なんか行かへんもん」と答える。そんな子どもたちに、教室でじっと席に着いていなくてはいけない理由をきちんと納得いくように伝えるにはどのような言葉をもってすればいいのか。そして、もしそれをきちんと伝えられないとしたら自分は教育の原点をわかっていないことになる。そこで、「学校とは、勉強とは、何のためにするのか」ということの本質を考える必要性を教えられた。

3, それでも子どもたちは愛されたいと思っていること

教師の言うことは聞かないし、気に入らないことがあれば物や友達や教師に当たり散らすし、注意すれば暴言を吐いたり暴れたりしてくる。それならば、放っておいてほしいのかと思って知らんふりをしていると、こちらにわかるようにわざと放っておけない悪さをする。何より、そんなに勉強がいやなら学校へ来なければいいのに、そんな生徒に限って毎日休まず学校へやってくる。家庭訪問で保護者と話したりする中で、家庭の様子が見えてくるが、そんな生徒のほとんどは親に甘えるということができない状況であることが多い。辛いことや苦しいことがあっても、十分に話を聞いてもらえる余裕がなかったり、話そうとすると親からうるさがられたり暴力を受けたりしてそれを吐き出す場が家庭の中にない場合が多い。教師と生徒との人間関係がうまくいっているときには、教師にそのような本音をポロッと話すことがある。そんな本音の話から聞こえてくるのは「もっと自分をかまってくれ！」という心の叫びである。

第3節 学校（教師）の役割

そのような生徒たちに対して、自分は教師として何ができるのだろうか？何をすべきなのだろうか？ということを考え続けてきた。生徒とぶつかりながらそのたびに、あの時どうして分かり合えなかったのだろうか、あのとき自分はどうすべきだったのだろうかということを考えさせられた。それと同時に、「あの子たちにとって中学校とは何なのだろう、

単に勉強を教える場所でいいのだろうか。」という疑問も突きつけられた。もし高校受験のための勉強さえできればいいのなら、高校へ進学する意志のない生徒は中学校へくる必要がないことになる。一般的な高校入試では受験科目にない「音楽」を教えている自分は何のために居るのかわからなくなる。ではいったい中学校の役割とは何だろう。もちろん、高校進学を希望するしないにかかわらず、すべての生徒たちに必要な基礎的な学力をつけるための十分な指導が行われなければならないことに異論はない。生徒の進路保障という観点から考えたとき、高校進学のために必要な学習指導は、それは中学校の大きな役割のひとつであることは間違いない。しかし、決してそれだけが中学校の役割ではない。進学を希望する生徒も、そうでない生徒も、中学生になれば思春期を迎え、様々な悩みやストレスを抱えたり、今の大人社会の不合理性も見え始めて反発をし始めてきたりする。時には大人ぶってみたり、でもやっぱり赤ん坊のように甘えたい反面も持ち合わせながら、毎日の生活を送っている。生徒たちにとって中学校とは、安心して勉強ができ、安心して悩みを吐き出し、ストレスをぶつけ、おかしいことはおかしいと言って、悪いことをしたときにはきちんと叱られて、そしてきちんと「ごめんなさい」を言えばまた許して応援してもらえる、そんな場所であるべきではないだろうか。そのために教師は、生徒に対して毅然とした厳しい指導も必要であるし、時にはそうした態度で保護者ともぶつかって話し合う必要もあるだろう。いずれにせよ中学校は、その根本が「生徒ひとりひとりの成長のため」という原点を出発点として本気で向き合ってくれる教師集団がいる場所であればならない。

第4節 コンテナーとしての学校(教師)

原田隆史¹²はその著書「本気の教育でなければ子どもは変わらない」の中で、自身の壮絶な教育実践の中、命がけで生徒と向き合う姿の中に、荒れた学校を変えるためには教師や地域の持つ「父性的な強さ」と「母性的な優しさ」と「子ども性的な自由さ」のバランスが大切であり、今の世の中は「父性的な強さ」が欠けていると述べている¹³。確かに、その「父性的強さ」がないと、指導が入りにくい生徒や暴力的な生徒に正面からぶつかることは困難で、そのために筆者自身もこれまでの試行錯誤の中でずいぶんと悩み失敗もしながら、そのような父性的な強さを身につけてきたと実感する面がある。しかし中学校においては、筆者はそれに加えてまだまだ「母性的に包み込む力」の不足を痛感している。

前節で述べたように、中学生の子どもたちは皆、それぞれに思春期特有の悩みやストレ

¹² 原田隆史 1960年大阪府生まれ。奈良教育大学卒業後、大阪市立中学校教諭として20年間勤務。クラブ指導、体育指導、生活指導を通して子どもたちの「生きる力」を高める取り組みを実践する。現天理大学人間学部講師

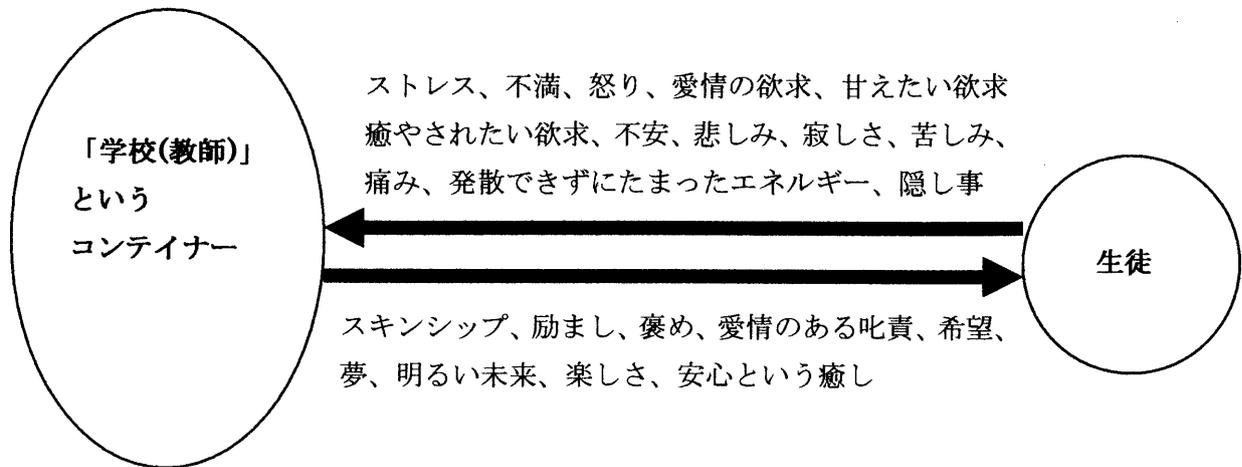
¹³ 「本気の教育でなければ子どもは変わらない」原田隆史 旺文社(2003) pp.126-129

スを抱えて学校にやってくる。時として、その発散の方法をはき違えて物に当たってみたり、友達や教師にぶつけてきたりすることがある。そんなとき、そのために物を壊したり人を傷つけたりしたことに対しては、教師は父性的な強さを持って毅然とした態度で過ちを認めさせ、反省の気持ちと謝罪の態度を教える必要がある。それと同時に、きちんと反省し謝罪ができたならそのことを認め、あのときどうすればよかったのか、これから同じ失敗を繰り返さないためにどう気をつければよいのかななどをじっくりと寄り添って話すことが必要である。そうやって母性的に包み込むことで、その生徒のこの度の失敗を、学校が全て受け止めたうえできちんと叱って指導し、失敗をプラスに変えてその生徒に返すことができる。

学校は、生徒がそうやって自分の中身を安心して吐き出せる場であることが必要であり、生徒にとって教師がそれを正面から全力で受け止めてくれる存在になれば、生徒は必要以上に学校で暴れる必要もなくなるはずである。さらに、学校に来れば、自分の悩みを聞いてくれる人がいる、心の痛みを和らげてくれる人がいるという関係ができたとき、中学校は生徒に対して本来の役割を果たすことになるのではないだろうか。

赤ん坊と同じように、思春期を迎えた中学生にはどこからともなく訪れて自分を苦しめる不安や苦痛が山のようにある。それは様々なストレスであったり、甘えたいけど中学生にもなって甘えていられないという満たされない愛情の欲求であったり、勉強や進路に対する不安や恋愛や友人関係の悩みなど、実に様々なものである。その中には、赤ん坊と同じように彼ら自身がいったいこの苦痛はどこから来ているのか理解できない事も少なくない。しかし、中学生になった彼らには、乳房を含ませてくれる母親はいないし、抱きしめてもらうことも恥ずかしさが先立って自ら拒んでしまいがちな年齢である。それでは、赤ん坊が母親の乳房を通じて排出していたような不安や苦痛を、どこに向けて排出していけばよいのだろう。

成長に伴ってその苦痛や不安を、うまく家族や友人との関わりの中で、またはスポーツや趣味に没頭したりする中で排出できる場合もある。しかしこれは「昇華」という防衛機能であり、苦痛や不安の問題そのものと対峙している訳ではない。対処療法であって、問題解決には至っていない。結局、実際はその排出先を見つけられずに心がパンクしそうになっている生徒が実にたくさんいるのが中学校の現場である。逆に、そのような苦痛や不安と向き合うことが思春期を迎えた中学生である証であるとも言えるだろう。そのような生徒と日々向き合い、指導していくために「学校」は、赤ん坊にとって母親がそうであったように、生徒たちにとって苦痛や不安を安心して排出することのできる「コンテナ」¹として機能し、そこで直接生徒と関わる「教師」は母親の「乳房」としての役割をすることが必要であると筆者は考える。そして生徒の苦痛や不安を受け止めた教師は、それを感じている生徒の心に共感し、苦痛や不安を共有し、それを励ましや褒めや愛情ある叱責の言葉として、時にはスキンシップとして生徒に返してやることで、母子関係と同じような教師と生徒の関係性が成立する。(図)



そしてそのような営みの繰り返しの中で、生徒は自分自身の中に“自分専用のコンテイナー”を作り上げ、不安や苦痛に対して自分自身で乗り越えていく力、つまり人間としてたくましく生きていく力を身につけていくのである。

学校がそのような空間として、またそこにいる教師がそのような対象として存在することで、生徒は中学校を母親に抱かれた時と同じような居心地の良い場所と感ずることが出来るはずである。

生徒にとって学校が容器 (container) として、教師が母親の乳房として機能し、そこに生徒が安心して苦痛や不安という内容 (contained) を排出する。そしてそれを学校が教師を通じて安心に変えて生徒に返してやる、その繰り返しの経験を通して、生徒が甘えから自立し、自分自身で困難を乗り越えて強く生きていく力を身につける。このような“中学校におけるコンテイナー機能”こそ、多くの問題が指摘されている現代の中学校教育にとって最も必要なことであると筆者は確信している。教師の半分は男性であるが、男性も女性も、全ての教師が生徒に対してこのような「母性的に包み込む力」という考え方を持ちながら教師としての役割を果たしていくことが、生徒の成長のために必要な条件であると筆者は考えている。

そのために教師は当然、生徒を我が子のように愛情を持って接して行く必要がある。表面的に授業だけを淡々と進め、生徒の心の内を見ようとしないうような教師では、これまで述べてきたように一人一人の生徒の内面に向き合っていく指導は到底できない。何十人、何百人といった生徒を相手にしてこのような役割を果たすためには、膨大なエネルギーを必要とするとても大変な仕事ではあるが、そのように生身の人間を相手に心を通わせて導くという事こそ、教師という仕事の醍醐味であり、それに取り組む教師という仕事の素晴らしさは正にここにあるといえるだろう。

第5節 中学校をコンテナーとして機能させるためのアイデア

第1項 安心して「うんち」のできる学校

赤ん坊は当たり前のように、したいときに「うんち」をする。そしてそれがおむつにたまった不快感を、泣きわめくことによって母親に伝え、それに気づいた母親が「よしよし、うんち出たねえ。おしりきれいきれいしようねえ。」と処理してくれる。「うんち」は母と子を安心でつなぐための大切なファクターとなっているのである。ところが、中学生ともなると学校のトイレでは（特に男子は）「うんち」がしにくい。その理由として、

- 1, 休み時間は多くの生徒がトイレに行き、しかもほとんど90%以上はおしっこをしに行く生徒ばかり。「うんち」はおしっこと違って個室に入らなければならない、ボタンとドアを閉める音でみんなから注目される。出てきた後のみんなの視線が怖い。
- 2, 基本的にする人が少ない。ということは、トイレットペーパーが切れていてもそのことを気づく生徒も少ないし、実際すべての個室で切れていることもよくある。本来ならばトイレ掃除の子が補充をするところであるが、サボってばかりできちんと補充する班は少ない。かといってそんな緊急事態に職員室へ行って先生に「トイレットペーパーください」と言うのも死ぬほどつらく勇気がいることである。
- 3, 学校で「うんち」をしただけでクラスの噂になり、時にはそれをネタにいじめられることもある。

などが挙げられる。自宅では誰もが当たり前のように毎朝してくる、何の特別なことでもないことが、ひとたび学校のトイレでとなるととても恥ずかしく、勇気のいることになってくる。その点、女の子はいつも個室で密かにうんちをしても誰にもわからないので、筆者は羨ましく思っていた。

生徒指導担当となった筆者もそのような思いをしてきた一人として、自分の勤める学校では少しでもそのような思いを解消してあげたいと思った。そこで、ゴミや落書き、いたずら等の早期発見をかねて、毎朝すべてのトイレを点検し、トイレットペーパーの補充を担当外のすべての教師にお願いし、一斉に確認した。特に大切なのは、音楽室や被服室などの特別教室だけの4階のトイレである。実は、ここは人前でうんちをしにくい生徒たちが、人目を盗んで（授業中に「すみません、トイレに行ってきます」と言って出る場合もある）密かに安心して用を足す大切な場所である。そこにトイレットペーパーがなかったとしたら、その生徒は動揺してしまうだろう。また、点検の行き届いてないトイレの便器には、ペーパーの芯が突っ込んであったり、足元が吸殻だらけであったり、およそ落ち着

いて「うんち」ができるような場所ではないことが多い。しかし、どのような子でも時にはお腹の調子が悪くなることもある。特に試験期間中などはその傾向が顕著に見られる。最近では、精神的なストレスや不安定からお腹がゆるくなる生徒も多い。そんな時、学校内に安心して「うんち」のできるトイレがあることで、生徒は居心地よく学校生活を送ることができる。

人間にとって排泄は、生きていく上で欠かせない生理現象であり、生まれたときから食べることと排泄を繰り返しながら成長している。そのような人間として当たり前の行動を、家庭のトイレと同様、安心してできるトイレ環境を準備することで、学校がより高いレベルでコンテナ機能を果たす器（うつわ）となりうるのである。

第2項 全生徒の「今」を把握するために

生徒が安心して学校生活を送るためには、いつも生徒の「今」を教師が把握しているという信頼感が必要である。例えば、授業が始まったのに〇〇君がいない・・・と言う場合に、その理由と居場所を教師がきちんとわかっている、と言う当たり前の話である。いちいち生徒にそれを報告する必要はもちろんないが、もし生徒が「〇〇君は？」と心配して訊いてきた場合、「ああ、今保健室で休んでるから。」とか、「ああ、ちょっと理由があって今別のところにいるから。」と教師がしっかりとその子のことをつかんでいることが、他の生徒全体にも大きな安心感を生むことになる。逆に、授業が始まってしばらくしてから教師が「あれ？〇〇はどうした？」と生徒に訊くような場合、大体において生徒は黙っているが心の中では「今頃気付いたのかよ。遅いんだよ。どうせあいつは体育館の裏で□□と煙草吸ってるさ。もしかしたら△△もいないから二人に呼び出されて今頃△△はやられてるかも・・・」と言うように教師よりもずっと詳しく正確に現状を掴んでいることも多い。

何よりも、指導が大変だった時代には、登校していたはずの生徒が授業にいないというような事は日常茶飯事だったので、誰が今現在登校していて誰が欠席していて、登校しているはずなのに授業に居ない生徒は今どこで何をしているのかという生徒の動向を正確に把握する必要があったのである。

そこで本校では、全校生徒の「今」を正確に把握するために様々なことを実施してきた。まず、朝のホームルームで担任が出席確認をするとき、担任以外の教師も一斉に職員室を出て、(この「一斉に」というところが、職員の意識を統一するためにも、習慣化するためにも大事なポイントである)自分たちの担当学年の階へ移動する。担任は各教室で自分のクラスの出席状況を確認し、同時に担任外は各クラスを順にのぞき、担任から出席状況の報告を受け、ノート(表1)にチェックする。5クラスあれば5クラスともである。同時に担任外の教師で分担して、全部のトイレを個室まで全部のぞき、ゴミや破損状況、トイレトーパーがあるかどうか等の確認をした。そしてペーパーがない場合はすぐに補充した。屋上への出口の階段等、普段死角になる場所も一日一回は教師が直接確認をするよ

う心がけた。そして、担任がその日の予定を連絡したり、提出物の回収をしたりしている間に担任外の教師で、登校していないのにまだ欠席連絡のない生徒の家に電話連絡する。多くの場合は「さっき遅れて家を出ました。連絡遅れてすみません。」という保護者の声が聞けるのだが、時々「あれ、朝練に行くといつて7時半には家を出たんですけど。」というようなこともある。そうなる職員の間で緊急事態の黄色信号を心に灯して対応する。登校途中で何らかの事故に巻き込まれた可能性もある。実際は、1時間目が終わった頃に友達と2人で登校してきて、「誘いに行ってふたりで遊んでた・・・」と言うようなこともよくあるのだ。

そして、その時間学校にいない生徒（欠席、早退、遅刻、途中退出等）の氏名一覧をクラスごとに記入する専用のホワイトボードを職員室に設置し、（表2）誰が見てもひと目でわかるよう記入した。しかも、連絡ありの欠席は黒、連絡なしの場合は赤で記入し、理由がわかるまで学校から各家庭に連絡を入れる。早退をした生徒の氏名は緑色で書き、無事に帰宅したという電話が入ったら丸でかこむ。登校しているはずなのに今姿が見えないという緊急事態の生徒の名前は青で記入し、授業が空きの教師で学校中を探す。一時間探しても見つからない場合は保護者に連絡を入れる。

そして、1時間目が始まったらまた一斉に教師が動き、各学年の階へ移動し、すべての教室を空きの教師がのぞき、授業担当教師から出席状況を確認する。さっきいたはずの生徒がいなくなっている場合この段階で気づく事が出来る。音楽や体育・美術などの教室移動の授業もすべて空きの教師が分担して確認に行く。生徒の移動で空いた教室は戸締りと施錠をする。そして職員室へ戻りホワイトボードの情報を毎時間更新する。そして、登校しているはずの生徒が教室にいない場合、一番可能性が高いのは保健室である。この段階で3～4人の仲良しが教室にいない場合、集団で保健室でダラダラして甘えていて、養護教諭が一人奮闘していることが多い。そのような時、すぐに担当学年の空き教師が集団で保健室に行き、本当に体調の悪い生徒以外を教室に戻るよう指導することで、養護教諭との連携も取れるし、そこに来る生徒の状況も把握することができる。このようにして、毎時間毎時間学年教師が全員で、担当学年すべての生徒の「今」を確認することを当たり前の状況にしていくことで、生徒自身にも「勝手に抜け出してもすぐばれる」という歯止めを植えつけることができるし、逆に「先生たちはいつも見ていてくれている」という安心感を与えることにも繋がる。見方によっては、「子どもたちを監視しているようで、本当にそこまで細かく管理する必要があるのだろうか？」という考え方もできるが、我々教師は、何百人もの生徒の命を保護者から預かっているのである。何年何組の〇〇が今どこにいるかという基本的な情報をすぐに答えられないような体制では無責任と言われても仕方がないのではないだろうか。また、自分の経験から思うのは、それがきちんとできていないことは、学校が荒れてくる大きな原因の一つになると言うことである。

(表1) 各学年の確認ノート

2年欠席生徒		月	日	曜日		
	1組	2組	3組	4組	5組	
朝 HR	○	大日 池下	圓 道	○	○	
1限	○	大日 池下	圓 道	小 室	○	
2限	○	大日 池下	圓 道	小 室	竹 内	
3限						
4限						
5限						
6限						

解説：2時間目が始まったときの2年生のチェックの様子である。朝の段階で1、4、5組は全員出席、2組2人、3組1人が登校していない。1時間目が始まった段階で登校していたはずの小室がいない。確認するとHR後、体調不良を訴え、保健室で様子を見ることになった。2時間目が始まり、小室は早退することになる。さらに2限目始まりのチェックで登校していたはずの竹内の姿が見えない。

(表2) 職員室の欠席者一覧ホワイトボード

欠席生徒一覧		月	日	曜日	
	1年	2年	3年		
1 組	山田 田中	○	馬阪 淵倉		
2 組	北倉 村田	大日 池下	伊人 藤見	西	
3 組	橋大 本串	圓 道	○		
4 組	○	小 室	奥藤 田井		
5 組	福 井	竹 内	松 井	榊	

解説：2限目現在の全クラスの欠席状況を表している。赤字は家庭連絡なしの欠席。(学校から連絡をとる。)2-4小室は早退したがまだ帰宅したと言う連絡を待っている状態。西はすでに早退して帰宅したことを確認済み。竹内は、登校していたのに現在行方不明。(学校中を捜し、1時間捜しても見つからない場合は保護者に連絡をとる。)

このような具体的な取り組みの方法は、毎日のように生徒が勝手に授業を抜け出して、校内の死角や学校周辺にたまって、抜け出し常連の生徒が今どこで何をしているかつかめないう状況で、「何とかしなければ」と、目の前の「荒れ」と闘っていた教師集団の中で必要に迫られて試行錯誤の末に生まれた方法である。もっと別の効果的な方法もあるかもしれないが、本校の場合、現在もこの形で安定して取り組まれており、かなりの成果を挙げていることも事実である。

そして付け加えておくと、保健室や、校舎の死角から教室へ戻ることのできない生徒に対して、教師はその時間が終わるまで職員室でやるべき仕事があろうと絶対にその生徒のそばに居続けることが大切である。生徒が教師を受け入れず、会話が成立しにくいようなときでも、何もしゃべらなくてもいいからとにかくそばに居ることである。教師に抜け出しを見つけてあわてている生徒に対し、「どうしたんや？」と穏やかに語りかける。(穏やかな口調でない方がいい場合もある)そして、教室に行くよう話しながら、これは無理だと判断した段階で、職員室での仕事はきっぱりあきらめて、目の前の生徒とできる範囲でいろんな話をしながらその子の思いを聞きながら「ふんふん・・・」と肯き、その子の思いを受け止めていこうとする姿勢が大切である。それがたとえ屋上の階段や、体育館の裏であろうと関係ない。そうすることで、もしかしたら次の時間は自分から「先生、授業行くわ」と前を向いて動き出すかもしれない。その生徒が教室に入れないのは、それなりの理由があるからである。いけないことぐらいは生徒自身が十分にわかっている。それでも入れないのはなぜなのか。生徒はそれを本気で聞いてくれる大人を求めている。仕事があるからと言ってそんな生徒を置き去りにして職員室へ戻ったり、頭ごなしに話も聞かずに叱りつけたり、力づくで教室に入れようとしても、生徒は反抗するだけで教室から遠ざかるばかりである。教師不振や対教師暴力はこのような場面で生まれる。

第3章 「音楽」と人との間の関係性

これまで、中学校における主に生徒の心の指導において「コンテイナー機能」を踏まえた指導が有効であることを述べてきた。この章では視点を変えて、筆者のこれまでの音楽指導の中から、「音楽」そのものの中に「コンテイナー機能」があることを検証し、その認識に基づいた音楽指導の効果を論述していく。

第1節 中学生と音楽

第1項 授業で歌わない生徒たち

筆者が新規採用された昭和60年頃、津市内の音楽教師の集まる津市教育研究会音楽部会では、「生徒が生き生きと表現する中で音楽性を高めるにはどうすればよいか」という研究テーマのもとで音楽教育に関する研究がなされていた。しかしその当時、中学生が授業の中でなかなか歌わないという状況があり、研究テーマ以前の問題で苦勞している教師が多く、その研究会での論議も「歌わない生徒をどうやって歌わせるか」という方法論をめぐるものが多かった。

実際に見学した研究授業では、一番歌わないといわれる3年生のあるクラスに対して、そのクラスを指導してきた音楽教師に代わって、講師として招いた経験豊富なベテラン教師が授業をするというものだった。生徒は初対面のそのベテラン教師に対して、まるで能面のように無表情な反応しかせず、それでもその教師は笑顔で必死に歌うことの楽しさを伝えようとしていたが、いくら合唱指導のベテランであっても、初対面のクラスに対してたった一度の授業でガラリと声の出る合唱に変えられるはずがなかった。この様子を見て筆者は、この生徒たちが歌わない理由は、教師の方法論だけでは解決できない問題が内在していると考えた。

このような生徒たちも、授業ではなかなか歌わないのに、休日には友達とカラオケに行き、そこでは歌うことを心から楽しんでいる。いやなら行かなくてもいい場所に、お金を払ってまで自分から行くわけだから、彼らは決して歌うこと自体が嫌いなわけではないはずある。では、なぜこの生徒たちは、授業という場で歌わないのであろうか。その理由はどこにあるのだろうか。精神科医であり音楽療法士である村井靖児はカラオケの効用について、次のように述べている¹⁴（下線は筆者による）。

¹⁴「音楽療法の基礎」村井靖児著 音楽之友社（1995）p.139

カラオケを見ますと、カラオケの中には、与えられる娯楽から、積極的に自分を表現する娯楽への視点の転換が見られます。言い換えれば自分の精神的健康を自分の手で管理しようとするたくましい生き方があります。いつの時代にもある庶民の健全さです。カラオケには、エコー、画面、移調技術、歌詞の先読みなどいろいろな工夫がされています。カラオケは、エコー掛けによって自分の声を出すことの快感、ひいては人間が生きていく上での最低の支えであるナルシズムを満足させます。—中略— カラオケは 1 人で行くよりもグループで行く方が楽しく、たいていグループで出かけます。相手が歌う知らない歌を聴く、それに挑戦する、自分を皆の前に出す、皆に温かく迎えてもらう (A)—それは人生の勉強であり、挑戦であり、その勉強や挑戦を楽しくわくわくしながらやれるところが、カラオケの音楽療法としての卓越性だと思います。しかも歌う側の、うまくなりたい、あの歌を覚えたい、一度は演歌に挑戦してみよう、などという気持ちを刺激する効果も含んでいます。

村井の論より、授業空間のあり方や自己表現のあり方に対して、多くの示唆を得ることができる。例えば、下線部 (A) は、「聴く＝挑戦する＝表現する＝評価される」という授業と同じ構造でありながら、誰が指導するわけでもないのに、さらにうまくなりたい、新しい歌に挑戦したいと、気持ちを刺激する場になっている。

村井の述べているように、生徒たちがカラオケに求めるものが

- ・「積極的に自分を表現する娯楽への視点」
- ・「自分の声を出すことの快感(ナルシズムの満足)」
- ・「勉強や挑戦をわくわくしながらやれること」
- ・「自分を皆の前に出し、皆に温かく迎えてもらう」

ということであるなら、生徒たちが授業で歌わないのは、授業の中にその求める物を見いだせないでいるからに他ならない。本当は歌うことや表現することを通して自分を表出し、他人に認められ受け止めてほしいという願望を持っているはずの生徒たちが授業で歌わないのは、「自分の声を出すことの快感」「ナルシズム」といった基本的な欲求が満たされないためだと考えられる。

もちろん、音楽の授業は生徒にとって心地よいだけのものである必要はない。カラオケと授業を同列に並べることはできない。しかし、村井の言う「自分を皆の前に出し、温かく迎えてもらう」ような空間作りは、音楽表現に欠かせない条件であると考えられる。それは音楽の授業でも同じである。お金を出してでも手に入れたい要素がカラオケにはあるのに、音楽の授業にはそれがないとすれば、授業の中に求める物を見いだせないでいるからであり、授業者である音楽教師は、そのような空間を作り出すための更なる努力を惜しんではならない。

第2項 同質の原理

音楽を聴きたいとか歌を歌いたいとか、私たちが音楽を求めているとき、いつでもどんなときでもどんな音楽でもいいから聴きたい、歌いたい、というわけではない。そのときの気分や体調、心の状態によって、求める音楽の種類も変わってくる。スポーツでたくさん汗をかいた後はすっきりした飲み物をゴクゴクと飲みたくなるし、腹ペこのときにはお腹いっぱいご飯を食べたくなる。和食がほしいときもあれば、お肉やパスタを食べたいと思うときもある。それと同じように、聴きたい、歌いたいと思う音楽もそのときのその人の状態によって様々である。

アメリカの精神科医 **Altshuler** は精神病院で統合失調症患者の音楽療法を行うときの治療戦略として1952年に「同質の原理」を提唱した。彼はそのような患者を治療するために、まず最初にどのような音楽を与えたらよいのかを研究した結果、最初に与える音楽は、患者の気分とテンポに同質の音楽であるべきだと考えた。この「同質の原理」は現在の音楽療法の治療原理のうち、欠かすことのできない概念のひとつとなっている。それについて村井は、

私たちは、憂鬱なときには憂鬱な音楽を聴きたいですし、陽気なときには陽気な音楽を聴きたい。深刻なときには深刻な音楽を求める。そういう具合に、自分のそのときの気分と同じ音楽を選んで聴こうとします。—中略—そこで同質の原理をもう少し日常的な言葉に言い直しますと、「今患者さんはどんな音楽を歌いたい(聴きたい)と思っているのか、それを患者さんの側に立って考えてみる」ということになると思います¹⁵。

と述べている。このことを音楽の授業に置き換えて考えると、授業にやってくる生徒は、それぞれの気分で音楽室にやってくる。友達とはしゃぎながら元気に音楽室にやってくる生徒もいれば、さっき友達と喧嘩をしたばかりで気分が落ち込んだ状態で来る生徒もいるかもしれない。生徒が30人いればみんなそれぞれ30通りの気分でやってくるのだ。そこで、教師がいきなり混声合唱曲を「さあ、歌いましょう。」と喋りいきなり伴奏を弾き始めても、生徒たち全員がそろってその音楽の世界の気分で歌うことはできないだろう。元気にはしゃぎながらやって来た生徒は、ついついその高いテンションのまま、叫び声のように歌い始めるかもしれないし、喧嘩したばかりの生徒は、そんな心の状態のまま歌など歌えるはずがない。例えばそこで教師が、「〇〇君どうして歌わないの!」といきなり叱ったとしたらどうだろう。その生徒はその音楽教師に対して反感を持ち、それ以後どんなに気分のいいときでも二度とその教師の授業では歌いたくないと思ってしまうだろう。

「同質の原理」は、音楽療法、つまり病気を抱えた人の治療のために考えられた概念である。しかしこうして考えると、心地よいと感じる音楽は病気を抱えた人に限らず、全て

¹⁵「音楽療法の基礎」村井靖児著 音楽之友社（1995）pp.75-76

の人に対しても基本的にはその人のそのときの気分やテンポと同質の音楽を聴きたがるということが言える。確かに音楽の授業は病気の治療の場ではない。しかし、生徒たちが音楽室にやってきた時点でひとりひとりの心の状態が同じであるはずがない。音楽療法では、患者の治療が目的であるから、セラピストはその患者個人の心の状態にあわせた音楽を探し選択し与えることから始める。しかし授業の場合は生徒の音楽教育が目的であるから、生徒の状態によって音楽を選んでばかりはいられないし、授業には30人の生徒が同じ空間にいる訳で、全員に共通する同質の音楽などあり得ない。したがって、音楽の授業では音楽療法とは逆に、教師が指導したいと考える音楽題材を味わったり表現したりするために必要な気分やテンポに、生徒たちの心を少しでも近づけることが必要となってくる。音楽療法のように患者と同質の音楽を探すのとは逆に、指導したい音楽に対して生徒の心を同質に近づける作業が必要なのだ。音楽は心を表現する教科であるから、教師はそのことを踏まえ、授業の導入時や、表現活動を始める前には、生徒たちの心の状態をできる限りつかみ、語りかけやその内容・口調等を工夫して生徒たちが表現しやすい雰囲気を作り上げ、生徒たちの心をこれから始めようとする音楽活動の題材と同質に近づけるような努力が必要になる。前に述べた歌わないクラスの音楽教師は、その努力をせずに、歌わないのは生徒が悪いとでも言わんばかりの態度で授業を進めてしまったために、生徒たちはその無神経さに反感を持ち、そのような場面の積み重ねによってその教師の授業では歌う気持ちになれなくなり、あのような歌わないクラスができあがってしまうのだと筆者は推察する。

第3項 「場」の空気

前項で述べたように、人が心地よく歌を歌ったり表現活動をするためにはそれに必要な心の状態が必要である。また、その表現を受け止める側に対しても、自分の表現をしっかり受け止めてくれるだろうという安心感があって初めて自分の心を表現しようという気持ちになる。このような状態を根津知佳子は「音楽的場¹⁶⁾」と呼んでいる。「音楽的場」において大切なのは、表現する側の心の状態と、それを受け止める側の聴きたいという心と、もう一つはその相互間の「信頼関係」である。前項で取り上げたあのクラスの生徒たちが授業で歌わなかったのは、授業者である教師がそのことを理解せず、「音楽の授業なのだから生徒が歌うのは当然」といった認識しかないまま授業をすすめようとしていたからであり、決して生徒たちが特別なのではない。原因は生徒ではなく教師の方にある。その教師の音楽の授業という「音楽的場」の中に、またその教師と生徒たちとの間の人間関係の中に、生徒たちを「歌うことが楽しい」とか「もっと歌いたい」という気持ちにさせるための要素が欠けているのである。そのような状態で教師が、「歌いなさい」と言ったところで、

¹⁶⁾『音楽的場と「臨床の知」』根津知佳子 感性哲学 4 (2004) 東信堂 pp. 34-35

生徒が「はい、わかりました。」と歌い始めるはずがない。また、そのような「場の空気」や「教師との関係性」を築き上げるためには、一定の時間が必要である。生徒はまず初対面の教師の話し方やしぐさを見てそれに反応し、それに対して心地よいアクションが教師から返ってきたとき、また反応を返す。そのようなやりとりを繰り返す中で、「生徒と教師の関係性」ができあがり、その中で「歌うことや表現することの楽しさ」を教師がどう伝えるかは、その教師の努力と熱意次第だと筆者は考える。そして歌うことの楽しさが生徒に伝わったとき、生徒は自分たちから積極的に歌いたいと思うようになるのだと考える。

このような考えの上に立ち、筆者がこれまでの経験のもとに現在自分の授業実践の中で常に心がけていることを、ひとつの試論として以下に挙げてみる。

- 1, まずは生徒が歌おうが歌うまいが、教師自身が楽しそうに声を出して歌ってみせる。生徒が歌わないからといって最初から怒ったりしない。生徒が声を出さないのは歌いたい気分になっていないからであって、それは自分の授業空間作りがまだ十分ではないのだという自覚を持つ。
- 2, とにかくどんどん歌う。特別な予定がない限り、授業の最初10分から15分くらい(3~4曲)いつも全員で歌を歌う習慣をつけている。そして、音楽の授業は歌を歌うのが当たり前という空気を作り出す。
- 3, 歌う曲は、それが合唱曲であっても、初期の段階では全員がメロディーパートをつなげて歌ってかまわないし、多少音程がずれていたりしてもいちいち曲を止めて注意したりしない。とにかく「歌を歌うと気持ちいい」という体験を生徒たちにさせることを第一目標に掲げて、安易に音楽の流れを止めないよう心がける。
- 4, 歌っている中で、ハモれそうなところがあれば教師自身がハモって見せる。そのうち生徒たちが「ハモったら気持ちいい」と感じることを信じて歌い続ける。
- 5, そのときに、ピアノ伴奏はテンポや強弱の変化などできる限り音楽的に表現豊かに弾くよう心がける。その中で、音楽の流れに変化があると感動が増大するという体験をさせる。
- 6, 生徒が積極的に歌えたときや、いい歌声が聞こえたと感じたときには、必ずそのことを言葉にして褒める。

「音楽的場」において根津の言及する、教師と生徒の間の「信頼関係」を築くために、このように心がけながら日々の授業に臨み、その上で生徒との間に「この先生の言う通りにやってみたらうまくなれるかもしれない。」という信頼関係が成立したと感じたら、少しずつ授業の中で音楽的要求を高めていくようにしている。

中学生という年代は、思春期を迎え精神的にも肉体的にも不安定になりがちなときである。人前で自分の意見や気持ちを言葉や態度にして表現することがとても恥ずかしく感じてしまう時期である。歌うことに関しても、変声期を迎えた生徒はとても歌いづらく、思うような声が出ないことから歌うことに消極的になったりもする。しかし、自分の中に溜まってくるあらゆるエネルギーは、人生の中で一番パワフルな時期であり、その発散の仕方さえうまくすれば、無限の可能性を秘めた時期であるとも言える。実際にその恥ずかしさ等のためらいを乗り越えたクラス集団は、どんどんと声を出すことに積極的になってくる。そのたびに教師が、声の響きや音程や表情等ひとつ上の課題や目標を具体的に提示してだけで、生徒は自ら自分たちの声を高めていこうとする。

ところで、そのような中学生が、音楽の授業にくるとき、そこにいったい何を求めてくるのだろう。一般的には、高校の入学試験にも音楽のテストはないから、生徒にとってある面気楽な教科であろう。このことについて筆者は、それでいいと考えている。音楽の授業にきて、みんなと一緒に歌ったり自分の内面を外に出す作業をしたりすることで、生徒自身が「楽しい」とか「歌ったら気持ちいい」とか「もっと歌いたい」とか感じる事ができたら、それこそが音楽科の授業の一番本質的な目標を達成できたことになると考えるからである。音楽を気楽に楽しむことができたらそれは素晴らしいことだと考える。中学校を卒業した後は、もう一生音楽の授業を受けるチャンスがないという生徒もたくさんいる。そんな中で筆者は中学校の音楽の授業を通して、生徒が「音楽が好き、音楽は楽しい」と感じて卒業してほしいと考えている。

第2節 「音楽」の持つ力

中学生に限らず、人は自ら求めて音楽を聴く。好きなアーティストのCDを買ったり、ライブやコンサートに出かけたり、音楽番組をTVやラジオで観たり聴いたりする。また、歌や楽器を演奏する人たちは、仲間を求めて集まり、ともに練習したりコンサートを開いたりして楽しむ。上級生の活動の様子を見聞きして、吹奏楽部にも未経験の新入生たちが希望を胸に集まってくる。町へ出ると、カラオケボックスもにぎわっているし、ほとんどの種類の店舗ではBGMとして音楽が流れている。また最近ではメディアの進歩により、多くの人々が道を歩きながら、電車の車中でも、携帯音楽プレーヤーで好きな音楽を聴く時代になってきた。また音楽療法等、医学や精神分析の領域でも、音楽そのものを活用されるようになってきている。それでは、音楽にはいったいどのような力があり、人々はどこに何を求めて音楽に関わろうとするのだろうか。村井が、“音楽の心理的作用”について述べている五つの力を要約して挙げてみる¹⁷。

¹⁷「音楽療法の基礎」村井靖児 音楽之友社（1995）pp.50-59

1, 「音楽による気分の転導」

音楽の音の流れの変化がひとつの力道と考えたとき、それは人間の感情の力道と酷似していて、その音楽を聴くことによって人の感情をその音楽の力道に引きずり込む力のことである。

2, 「感情の誘発」

現在持っていない感情が、音楽によって誘発されること。ある曲を聴いて突然昔のことが思い出されること等はこれに当たる。

3, 「発散」

内に鬱積していたものが外に表現される状態。カラオケなどで歌うことや演奏すること以外にも、鑑賞のような運動を伴わない音楽活動でも発散が起こる。

4, 「感情の高揚、鎮静、正常化、浄化」

音楽による気分の転導は、その方向によって高まる方向、静まる方向、あるいは正常化の方向など様々な方向が存在する。それぞれの気分に基づいて、高揚的音楽、鎮静的音楽、調整的音楽などの名で呼ばれる。また音楽を聴いて心が洗われるような気分になることを浄化作用と呼ぶ。

5, 「励まし、慰め」

音楽を聴いて励まされたり、慰められたりすること。

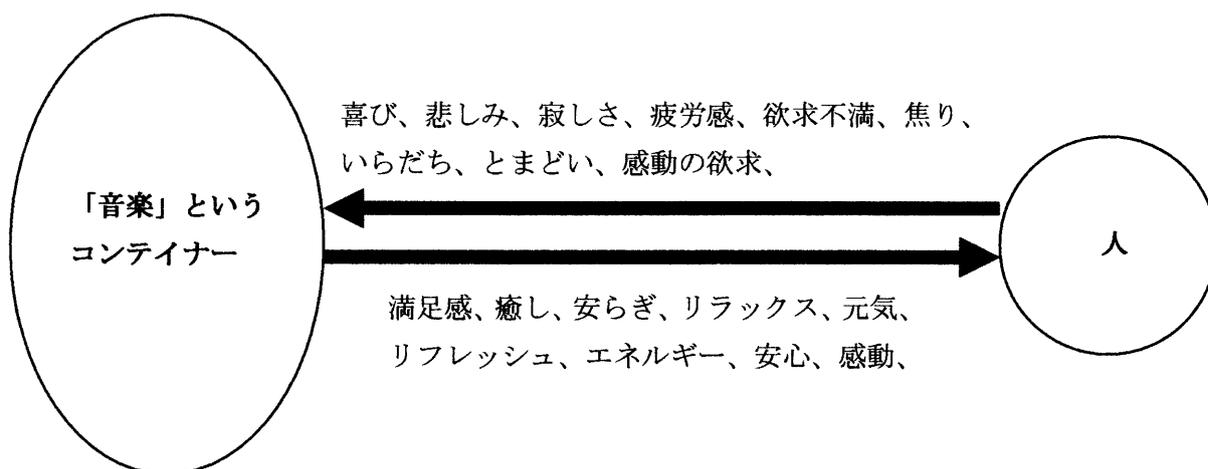
これらは、セラピストが患者に音楽療法を行う際に有効に活用されている音楽の持つ力であるが、それは音楽療法に限らず日常生活の中で人々が音楽に接する際に起こるごく自然な心理的作用でもある。例えば筆者が激しい仕事で心身ともに疲れているとき、帰りの車の中でゆったりとした音楽を聴いてリラックスすることは、感情の「鎮静」作用や疲れやストレスを「発散」し、次の日もまた頑張ろうという方向に「気分の転導」が行われることで「励まされ」「慰め」られる。多くの店舗で流されている GBM に関して、客の購買意欲をそそるよう、商品のイメージや季節感を考慮した選曲を工夫し、店の商品を購入したいという「感情の誘発」を目的としている。そのような中でお客は、商品を手にする喜びと同時にその過程であるショッピングそのものを楽しんでいる。

また、音楽を聴くことでこのような心理的効果があるからこそ、人々は無意識的に自分の求める感情力道を有する音楽を求め、CD を買ったりラジオを聴いたり、コンサートに出かけたりするのではないだろうか。そしてその音楽の持つ力道に自分の感情を同化させていくことで自分の感情をコントロールしようとしていると考える。また、中学校で生徒が吹奏楽部のような音楽クラブに入部してくるのも、その理由の 1 つに音楽活動を通してそのような心理的作用を求めて集まってくるのではないだろうか。

第3節 「音楽」と「コンテイナー機能」

同じ音楽でも、それを聴く人の心の状態によって、心地よいと感じたり不快に感じたりするのであるが、人は誰もそのときに心地よいと感じる音楽を求めている。そして、心地よい音楽に巡り会い、それに浸っているとき、その人の心はその音楽の世界に包まれ、様々なストレスから解放される。筆者は、人々が心地よい音楽に浸って心を解放しているとき、赤ん坊の時に母親の乳房を口に含んで、まどろんでいる状態と共通する安心感を得ているのではないかと考える。村井が先述の4で言及している「感情の浄化」の項で彼は「音楽は空調機のようなもので、心の中の古い汚い空気を音楽によって新鮮化する作用を持っていると言えます¹⁸」と述べている。つまり、人々は音楽を聴くことで、心の中にあつた不安や苦痛、ストレスなどを音楽の中に吐き出して、音楽という洗浄機がそれを清浄化して新しい気分になることができる。言い換えれば母子関係において母親がコンテイナー機能を持つように、音楽にはそれを聴く人の心をコンテイナーとして包み込み、様々な感情を一旦取り込むことで、それをより受け入れやすい形に変えて再び人の心に返すというコンテイナー機能を備えているということができないのではないだろうか。(図)

図：音楽と人との関係性



図に示したように、人が心の内に持つ「喜び、悲しみ、寂しさ、疲労感、焦り、いらだち、とまどい、感動の欲求」などの様々な感情を自分の好きな音楽、つまり自分の感情力道にあつた音楽を求めそれを聴いて心を浸すことで、その音楽がコンテイナーとして働きそれらの様々な感情を高揚、鎮静、正常化、浄化する。「喜び」はそれを満足感として高揚させ、「悲しみ、寂しさ、疲労感」は正常化、浄化して「癒し、安らぎ、リラックス、元気、リフレッシュ、エネルギー」に変えて、「欲求不満、焦り、いらだち、とまどい」は鎮静化

¹⁸「音楽療法の基礎」村井靖児 音楽之友社（1995）p.55

して「リラックス、安心」等に変えて、「感動の欲求」はそれを満たす「感動」として、人の心にフィードバックされる。

このように、「音楽」には人の心にある様々な感情をより自分の受け入れやすい形に変えてくれるという“コンテナとしての力”を持っていると言える。そして、人々が好みの音楽を求めるのは、音楽のもつそのような力を直観的あるいは経験的に感じ取っているからではないだろうか。

第4章 吹奏楽部顧問の視点から

この章では、筆者が顧問をしている橋南中学校吹奏楽部の本年度(平成19年度)の活動を記録・検証しながら、実際の生徒の様子や演奏の変化を追っていくことで、これまで述べてきた概念の必要性を確認し、教育実践の中で応用するための更なる課題を見出すことを目的とする。その方法として、生徒の様子をより客観的・具体的に捉えるために、筆者自身の指導の記述とともに、筆者の指導の様子を第三者が参与観察した記録や、随時行ってきた生徒へのアンケートの結果を織り交ぜながら論じていく。本校吹奏楽部は、年間を通して様々な学校行事や演奏会への参加等の活動を行っているが、この章では主に、夏の吹奏楽コンクールを目標に練習した時期を中心に焦点を当てる。

第1節 橋南中学校吹奏楽部の現状

筆者が本校に赴任して今年で11年目になるが、その間まるごと現場を離れ大学院で研究した昨年度(平成18年度)以外、毎年吹奏楽部の顧問を担当している。今年度4月の時点で、部員数は3年生24名、2年生18名に加え、23名の新入生が新たに入部して合計65名でスタートした。津市内の中学校の吹奏楽部では人数的にはやや多い方である。現在吹奏楽コンクールでは、30名までが小編成、それを超えると大編成という規定になっており、本校は近年、2~3年生を中心に40名前後で大編成として出場していることが多い。コンクールでの成績は、県大会で銀賞という年が多く、例年「目指せ金賞・目指せ県代表」といったことを目標にコンクールに臨んできた。

中部地区では、全国で毎年繰り上げられる朝日新聞社主催の吹奏楽コンクールの他に、中日新聞社が主催する中部日本吹奏楽コンクール(以下「中日コンクール」と表記)というこの地域だけのコンクールがある。中日コンクール三重県大会の中学校の部では例年、朝日のコンクールが終わった後に申し込みの締め切りがあり、9月の初旬に県大会が行われる。学校によっては3年生の引退の時期が延びることもあり、参加しないところもあるのだが、筆者の赴任2年目から橋南中も参加をしている¹⁹。

例年通り本年度も吹奏楽コンクールに参加するに当たり、朝日コンクールの課題曲はマーチ4曲の中から1曲を選択して演奏するのであるが、4曲全て音出しをして相談した結果、マーチ「ブルースカイ」に決定した。自由曲については、ここ3年間作曲家の鈴木英二氏の編曲による作品に挑戦して好結果を得ていることもあり、同じく鈴木英二氏の編曲作品であるヨハン・シュトラウスⅡ作曲の“喜歌劇「こうもり」セレクション”という曲

¹⁹ 巻末に資料として、本校のコンクール参加の記録(1997~)を掲載した。

を演奏することになった。近年人気を博している鈴木氏のこのシリーズは、中学生や高校生にも音域や技術的に無理のないアレンジでありながら、深い音楽表現ができる作品として知られているが、筆者もその素晴らしさに共感し、氏のアレンジ作品を取り上げるのは4年連続となるが生徒の賛成も得られ決定した。

コンクールに出場するメンバーは例年通り3年生24名、2年生18名に打楽器パートに1年生1名を加えた合計43名という形で準備を整えた²⁰。

第2節 音楽指導における情動調律

実際に生徒に演奏指導をする際、指導者は生徒との間でどのようなやりとりをすれば効果的に指導することができるのだろうか。その演奏箇所に対して、指導者がイメージしている理想的な演奏を様々な形で生徒に伝えながら、最終的に生徒自身がそれを自分のイメージとして表現できればよいと考える。そのために指導者は、様々な言葉や自らの声や演奏で生徒の表現を引き出そうとする。それは、指導者からの一方的な指示ではなく、指導者・生徒間の相互のやりとりを通して、生徒が指導者の求める音楽を自分の音楽として習得していくのではないかと考える。

以下は6月初旬、コンクールの課題曲の橋南中吹奏楽部のセクション練習の様子についての参与観察記録である²¹。文中の「T」は筆者、「C」は生徒の発言を表す。また、生徒の演奏部分は「♪1~14」で表されているが、その右（ ）内の斜体字部分は、生徒の演奏に対して筆者が感じた評価を書き加えたものである。

セクション練習

パート練習後、ピッコロ、フルート、オーボエ、クラリネット、トランペット、アルトサクソフ、グロッケン
のメンバーでセクション練習を行った。練習箇所は、課題曲「マーチ ブルースカイ」の「C」の前4小節
間で、メロディを担当するメンバー全員が集まった。

まず、先生の指示でチューニングをした。先生は、姿勢、音色(吹き方)に注意しながら進めてい
った。チューニング後は、ピッチ Bb から下行(アルト、トランペット→クラリネット→ピッコロ、フルート、オー
ボエの順で入る形で)を行った。

²⁰ それ以外の1年生は、9月の中日コンクールに、県大会のみで人数制限なしという「任意の部」という部門があり、毎年この部門に出場することを目標に練習している。今年も「Folklore for Band」を自由曲に選び22名でこの部門に出場することとなった。

²¹ 参与観察：日下瑤子（三重大学大学院教育学研究科1年）

場面1 ロングトーン

T : 準備が悪いといい音出ないし、逆にいい音出そうっていう気持ちがないから準備が悪い。気持ち、ここに何しに来てるかっていう気持ちが足りんのさ。いい音を、最高の、このメンバーで最高のこの4小節を作りに来たんやからそのつもりで1つ1つの音を出さないと、どんだけ時間かけて練習しても気持ちが伴ってないと。要は、三重県で1番うまいCの4小節前作りに来てるんやから。わかった？

C : はい！

T : 「パーッ」って音出してそんなんでできるわけないやんか。もう1回やり直しな。

場面2 メロディ練習(その1:テンポ80)

T : せっかく集まってきたんやから、頭と心精一杯使ってやらないと、コンクールで上位狙ってる時は、それぐらい今練習しとるんや。6月9日の土曜日にそれぐらいやとるわ。その中で、なんとなくやとって先生が教えてくれるかなあって、そんな気持ちでやとったら、お前らが最高の気持ちでやらんと絶対いい音楽はできん。お前らが作るんやで、お前らが良い音楽作るんや。1・2・(先生がカウントする。)

♪1 : (4拍後に生徒が吹き始めるが、出だしがそろっていなかった)

T : (とめる)最初悪かったやろ。もう1回、1・2・...

♪2 : (出だしはそろったが、付点のリズムがばらついている)

T : (メトロノーム)80で練習した？今一番やりたいのは音程もなんだけど、付点のリズムがタンタタ(16分音符)って正確に演奏できることが大事。

♪3 : (リズムに注意がいくあまり、スピード感に欠ける演奏)

T : ビヴラートもかけていいけど、お前らテンポがゆっくりやからって息のスピードも気持ちもゆっくりになっとる。(模倣唱)

三重県一のこの4小節間を作りに来てるんやから、誰が聞いても、「むっちゃうまい」っていう演奏つくりに来てるんやから。お前らにその気持ちが、〇〇中学校に負けやんって言う気持ちがあれば絶対出来る。最高の4小節！！1と2と3と4と

♪4 : (まだ先ほどの演奏とあまり変わらない)

T : テンションが違う。1と2と3と4と

♪5 : (繰り返す中で少しずつ演奏に勢いが感じられ始める)

—中略—

♪6 : (筆者もトランペットと一緒に演奏)

T : 俺と一緒に入ったら音楽が生き生きするでしょ。何でかって、息のスピードが違うから。

♪7 : (今度は生徒だけで演奏)

T : ちょっとよくなったけどまだ。もう一回。

♪8 : (息のスピードがかなり速くなってきて、演奏に躍動感が感じられ始める)

T : 付点の16分音符もうすこし引っ掛けな(トランペットで範奏)

♪9 : (生徒と一緒に演奏。生徒は先生の勢いのある演奏を必死で真似しようとする)

T : 最後まで緊張感を緩めない!

この後、①フルート、ピッコロ、オーボエ②クラリネット、アルトサクソ、トランペット③オーボエ、アルトサクソ、グロッケン④全員の順で何度か繰り返した。その中で、教師は、演奏のたびに16分音符・アクセントの位置・音の切りの勢い・フレージング等を指摘し、出来るまで何度も繰り返した。

場面3 メロディ練習(その2:テンポを上げていく練習)

T : 少し音楽に躍動感が出てきましたけど、まだテンポがゆっくりやからって君らの気持ちまでこうなってるんですよ。ゆっくりのテンポでも気持ちは前へ前へ。そうやって作っとかんとこれからテンポが速くなったときに躍動感のある音楽にならん。じゃあ、これから少しずつテンポを上げていく練習に入ります。(メトロノーム)88で。

♪10 : (ほんのわずか速くなったテンポについて行けず、バラバラな演奏)

T : 駄目です、遅い。テンポ上げたんだよ。もう1回。(トランペットで範奏)

♪11 : (少しずつそろってくる)

—省略—

T:もう1回全員で

♪12 : (7~8回繰り返す中で、80で演奏したときと同程度の安定した演奏が出来るようになる)

T : OK!(メトロノーム)88クリア次96! まずフルートだけ

C : はい!

* このようにしてクラリネット、サクソと順に作っていく。

T : 君ら自身が「ああ楽しい」という気持ちに本気でならんと、楽しさは伝わらん。104!ここから16分音符が甘くなり始めるから気をつけて。

♪13 : (このあたりから、自分たちから積極的に表現をしようという勢いが演奏に表れ始める)

T : そう、わりとよかった。「Taaan」って最後余韻つけて

♪14 : (一度の注意で演奏が素早く変化するようになってくる)

T : 今の演奏で三重県で15位くらいかな。何が足らんって、気持ちが足りない。もっとこう、こうやって向かいたいって気持ちが足りない。まだ準備が遅いし。

♪15 : (練習の最初と比べると、見違えるような演奏。生徒の姿勢や表情もまるで別人のよう)

T : OK!、今のいいです。

曲の練習に入る前に、教師は様々な角度から生徒の精神面に訴えかける言葉がけをしている。

テンポを上げていく中で、教師は、「息のスピード」「音程」「音の切りしかり」と技術面を言葉で示しながら、また、教師自身がトランペットと一緒に演奏して生徒に示していた。教師と一緒に演奏することで、生徒は、教師の真似をしようとして合わせていった。

また、教師は生徒が吹き終わるたびに上記のような注意をし、うまく出来たときは「OK!」「今のいいよ」と褒めた。「生徒が吹き終わる」→「教師のアドバイス」→「次の指示」のテンポが心地よく、だんだん生徒も真剣な顔つきになり、音程・息のスピード・フレーズが合っていた。

教師は、指導の言葉の端々に「三重県で〇位くらい」「〇〇中よりも」「三重県で一番の」と具体的なものを提示していた。指導の中で「三重県で1番」という指導者が示した具体的な言葉は生徒の動機付けを高めたと考える。

まず場面1のように話すことで、集まった生徒たちにこの練習で具体的にどのような演奏を創っていくのかという目標を同じレベルで持たせることを意図した。次に、♪1～5のように示すことで、筆者が具体的にどのようなレベルを求めているのかを生徒に伝えようとした。さらに、言葉だけでは伝えきれない音のニュアンスを伝える方法として♪6～11のように実際にトランペットを使って演奏して聴かせ、一緒に吹いたり、また生徒だけで吹かせてみたりというやりとりを繰り返しながら、徐々に生徒自身が自分の音楽として表現できるようにした。その間の言葉がけとして、イメージをもたせるために「息のスピード」や「気持ち」の持ち方などを言葉で伝えながら、うまくいくまで徹底して繰り返した。その中でいい演奏ができたときには間髪入れず「ちょっと良くなった」「OK!」と成果を認める言葉をかけるようにした。

しかし、これらの言葉がけやトランペットを用いた範奏などは、その都度筆者が頭で考えて行動していると言うよりは、いい演奏を引き出したいという願望から、直観的に体がそう動いているという方が的確である。生徒と指導者の間に「より良い演奏を創りたい」という共通の目的が持てたとき、生徒の演奏に対して指導者は直観的に言葉を発し、演奏して聴かせる。それを受けて生徒はまた直観的にそれを真似して自分のものにしようとする。そのようなやりとりの繰り返しによって、徐々に生徒自身が指導者の求める演奏を自分の力で出来るようになっていく。

この練習の中で「♪」で示した部分の繰り返し練習がなかったとしたらどうだろう。演奏を媒介とした情動のやりとりなしで、単に言葉での説明だけで果たして音楽のもつ勢いや細かいニュアンスまでも生徒に伝えることが出来るだろうか。この練習を通して、音符を追うようにただ楽譜通りに吹くことしか出来ていなかった生徒たちに、言葉で説明するだけではなく、教師が同じように模倣をして歌ったり、楽器で生徒の真似をして吹いて聴かせたりすることで、自分たちの演奏に足りないものを具体的に自覚し、理想的な演奏の形をはっきりと目標として定めることが出来た。さらにそこから、その部分を反復練習す

る中で、「生徒が吹き終わる」→「教師のアドバイス」→「次の指示」というサイクルを繰り返しながら徐々に生徒の演奏が教師のイメージする演奏の形へと近づいていった。

筆者はこのような形で指導するとき、第1章で述べた Stern の“情動調律”との共通点を見出すことが出来ると考える。泣いている赤ん坊に母親が「おお、よしよし、どうしたのお」と語りかけ抱き上げてその全てを受け入れるように、生徒の未完成な演奏に対して「なるほど、そう吹きたいんだね」と一旦受け入れる。赤ん坊の泣き声のトーンに合わせて母親が語りかける声を変化させ、そのやりとりを繰り返すように、♪3の後の「模倣唱」のように、教師が生徒の演奏を真似して聴かせることで、その欠点を自覚させ、再度生徒に吹かせてみる。赤ん坊の背中をトントンとたたきテンポが次第にゆるんで落ち着いていくように、教師の求める演奏に一步近づくごとに「そう、今の良かった」と褒めながら次の注文を与えていき、最終的に赤ん坊が母親の腕の中で安心して眠りにつくように、教師のイメージしていたような演奏を生徒が自分の表現として出来るようになる。このような母親と赤ん坊のやりとりと、演奏を通した指導者と生徒のやりとりには“情動調律”という共通する概念があると筆者は考える。そしてそれを通して、記号で書かれた音符をそのまま吹いていただけの生徒の演奏に、生徒自らが「生命」を吹き込むことが出来るようになるのではないだろうか。

音楽表現は、数学のように決まった一つの答えがある訳ではないので、そういう意味では指導者がイメージする音楽を生徒に教えることはなかなか容易ではない。しかし、このように心で感じているイメージを情動調律というやりとりを通して相手に伝えていくことで、文字や言葉だけでは伝え切れない音楽のもつ感情的な部分を教えていくことが出来ると筆者は考えている。言い換えれば、音楽の持つ情動を表現するような部分は、言葉や文字だけでは伝えることは出来ない。それを生徒に教え伝えて生徒がそれを自分の表現として獲得するためには、音楽の指導者は“情動調律”の概念を使った生徒との音楽のやりとりを媒介として伝えていく必要があるといえるのではないだろうか。

第3節 目標設定と部員の居心地の関係

クラブで何らかの行事に取り組もうとする場合、どのようなステージにしたいのか、それまでの練習期間を考えていつまでにどれくらい完成すれば良いかというような長期的な展望に立った計画を立てることが必要である。夏のコンクールで最高の演奏をするために、いつの時期に何をなすべきかという長期計画を立て、その計画と現状を考え合わせた上で初めて、今日のこの時間にすべき練習内容が見えてくるのである。そして、練習の進み具合により、現状は常に変化していくので、定期的に「今の目標はこれでよいのだろうか」という視点に立ち、必要があれば見直していく必要がある。

この節では、橋南中のコンクールに向けた練習の中で、そのような長期間にわたり目標

を設定していく様子を、時期を追って記述する。そして、その目標の内容と、生徒の感じる、吹奏楽部における「居心地」の変化を追っていくことで、吹奏楽部という空間が、部員たちにとってコンテナーとして機能していくことを検証していく。

4月当初

コンクール参加の目的に関して、全部員と顧問とで共通理解²²ができて、参加することが決定したら、具体的な到達目標が必要になる。吹奏楽コンクールでは、タイムオーバー等で失格しない限り、全ての出場団体に金銀銅いずれかの賞が授与される。そしてその上位チームから、規定により決められた数の県代表チームが発表される。今年度、朝日コンクールにおいて三重県の中学校大編成の部で県代表として東海大会に出場できる県代表は3チームとなっていた。

そこで、本校では4月当初部員たちと相談を進める中で、「今年のコンクールの目標は？」と尋ねたところ、「金賞」「県代表」「東海出場」「東海金」「全国大会」など、様々な意見が聞かれた。前年度は朝日コンクールが銀賞、中日コンクールが金賞だったことから考えると、妥当だと思える意見もあるが、現実離れした意見も平気で出てくる。「いい演奏がしたい」という共通した目標は明確にあるものの、具体的に今自分たちの力はどの程度で、自分たちが目指すべきもっとも適切な到達目標をどこに設定したらよいのかは、そう簡単に見えてくるものではない。それは、生徒の現在の能力だけでなく、これから作られるクラブ全体の一体感や、コンクールに向かう一人一人の意気込みによって演奏のレベルが大きく変わっていくからである。とりあえずこの時点ではそれ以上具体的には論議できる状態ではないと判断したが、これから練習を進めていく上で徐々に具体的な目標設定をする必要があることを部員たちと確認した。

この時点で生徒にはまだ話していなかったが、筆者自身の心の中で設定していた目標は県大会で3位以内に入って県代表になることだった。今年の橋南中学校の実力として努力次第で実現できるかもしれないという筆者なりの期待を持っていた。しかし、同じ大編成の部で出場してくる学校は年々増えてきており、(今年は25校)その中で代表の3校に入ることは相当難しいことでもあるのも事実である。どこまで到達できるかはわからないけれど、最終的な目標とするには妥当な線だと考えていた。

²² コンクール参加の教育的意義について、筆者の考えを補遺 (p.64) に記述した。

6月9日(土)

以下は、6月9日(土)の練習の参与観察記録からパート練習中に参与観察者が各部屋を回り、コンクールの目標について尋ねた部分の記録である。

部員の目的意識について

Box1(FI,Ob)

- 日下 : 今年のコンクールの目標は?
部員 : えっ(パート員の顔を見る)
日下 : 目標をどうぞ
部員 : 代表?
日下 : おー。東海代表?全国?
部員 : え、あー、どうしょ。全国に行く

Box2(CI)

- 日下 : パートリーダーさん、今年のコンクールの目標は?
パートリーダー : 目標?目標は、朝日のコンクールで代表、東海で金賞!

Box3(Euph)

- 日下 : パートリーダーさん、今年のコンクールの目標は?
部員 : 東海1番になって、朝日で東海でたら中日って出られないんですかね?
日下 : いや、いけるやろ。
部員 : じゃあ、中日もできれば東海いきたいです

部員にコンクールの目標をインタビューした。しかし、初対面だったこともあるのか、部員は、「えーっ」と困ったような顔をし、顔を見合わせた。部員は、どうしよう、何と答えようと考えて、「朝日のコンクールで金賞、東海出場」という目標が出てきた。パートによっては、さらっと目標が出てくるところもあった。

部員の中で、目標が明確になっていないのではないかと感じた。朝日のコンクールで金賞、東海出場、東海大会金賞等、目標があればそれに伴った練習が子ども達から自然に行われるであろう。目標をもっと明確にし、子ども達の中で練習に向かう気持ちを高めることが必要なのではないか。

4月からすでに2ヶ月も経過し、コンクール本番まで残り2ヶ月という時期で、このような意識の状態である。この時期、練習内容はまだ「ゆっくりのテンポで楽譜通り正確に」という段階だったので、その目の前の目標を達成するだけで精一杯で、コンクールそのものの最終目標を設定するところまでの意識には至っていない。

さて、このような状態の中で、生徒たちはいったいこのクラブをどのように感じているのだろうか。吹奏楽部は部員たちにとって居心地のよい場所となっているだろうか。この日の練習後のアンケートで「吹奏楽部は居心地がよいと感じましたか?」という質問をした。それに対し5段階で自己判断する形で以下のような回答結果が得られた。

	た と と も 感 じ	じ た ま あ ま あ 感	感 じ た	な か っ た あ ま り 感 じ	か っ た 全 く 感 じ な
吹奏楽部は居心地がよいと感じましたか?	5	4	3	2	1

回答結果（6月9日）

	5	4	3	2	1
3年生（22人）	9	6	5	2	0
2年生（16人）	6	3	3	1	3
1年生（20人）	18	2	0	0	0
合計（58人）	33人	11人	8人	3人	3人

結果の考察

1年生が5と4だけに集中した理由は、この日の午後の練習で1年生が全員の前で短いソロ曲をひとりずつ発表するという企画があり、一人一人に上級生全員がコメントを書いて渡したりアドバイスをしたりしたことが彼らにとってとても充実感を感じる要因となったことが考えられる。またその後、自由曲の楽譜を初めて配られ、上級生がとなりでその曲を合奏して聴かせるという取り組みをしたことも、1年生にとってはかなりプラスの刺激になったと思われる。これまでずっと基礎練習ばかりで教師の指導も上級生に偏りがちであったのが、この日初めて自分たちが主役のように感じて嬉しかったことで、全員が居心地がよいと感じたのだと考える。1年生が記入した理由も

- ・5 「先パイが優しいし、直した方がいいとこや、アドバイスをはっきり書いてくれるし、なにより楽器を吹いているのが楽しい。」
- ・5 「先輩の人たちがいいところはよかったといってくれて、よくない所はダメといってくれ、ここにいて（がんばれば）うまくなれるカナと思えた。」
- ・5 「吹奏楽部で音楽を聴いていると落ち着く。そういうことで居心地イーナーと思いました! 」

というように、この日の練習でこのクラブを十分に楽しいと感じていることがうかがえる。しかし、以下に示した2～3年生の状況は1年生とはだいぶ違う。

- ・5 「楽しいし集中できるし毎日が輝いているから」(3年生)
- ・4 「先輩後輩が仲がよくて、時には注意されたり怒られたりするけど、それが成長にもなるから。」(2年生)
- ・3 「まだ自分が先輩という立場になって時間が少ないし、しっかりしていない部分があって、部活以外の好きなこととの両立の不安があり、まだ不安定です。先輩が自分をどう思っているかも不安です。」(2年生)
- ・2 「みんなのやる気に差があるから。」(3年生)
- ・1 「何も楽しいと思わない。練習きつくて・・・頑張れそうな気がしません。あと、仲良くできない。(みんなと)」(2年生)

(* 全員のコメントを文末に掲載した)

この日1年生は一人もつけなかった「2」や「1」をつけた生徒が上級生には6人もいる。同じクラブで活動していながら、60人もいるとそのとらえ方は実に様々であることに驚かされる。顧問として大切なことは、ここで「2」や「1」と書いた生徒にしっかりと目を向けることであろう。

「2」と書いた3年生はクラリネットのパートリーダーで副部長も兼ねており、人一倍向上心が強く、みんなで心を1つにして全力で頑張りたいという気持ちを持っている生徒である。しかし、最近パート内の3年生で欠席の多い子がいたりして思い通りの練習ができていないことに不安と不満を感じている。

「1」と書いたのは3人の2年生であるが、それぞれに事情はあるもののクラスの友人たちと遊びたいのに休日もクラブがあってその時間がとれない事が最大の理由で、少しずつクラブ全体の空気になじめなくなってきた。個々に話を聞くと、「もっと遊びたい」とストレートな言葉が返ってくる。3人に対してはそれぞれに思いを聞き取り、顧問の考えを話しながら一緒に頑張ろうという働きかけを継続した。また、危機感を感じていたそ

それぞれのパート内でもその子の気持ちを聞きながら何とか一緒に頑張れるようミーティングの機会を持ち説得していた。しかし残念ながら3人のうち2人がコンクールを前にクラブを辞めていってしまった。

6月30日(土)～7月1日(日)

コンクール本番も約ひと月後に迫った6月30日(土)、「ゆっくりのテンポで楽譜通りに正確に演奏できる」という筆者の考える第1段階の完成度まで8割方近づいてきた。そろそろ本格的な音楽作りに入る時期がやってきた。そこで、自分たちの実力を客観的に考えて、このコンクールでどこまでの目標を設定するのか具体的な到達ラインを考える時期が来たと感じた。リーダーの生徒たちも、依然としてはっきりした目標のないまま漠然と練習をしている状況にミーティングの必要性を感じ、部員全体にそのことを提案した。リーダーたちを中心に同じ思いを抱いていた生徒も多く、すぐに了解しミーティングを開くこととなった。

各学年に分かれてミーティングの形をとり、そこで学年ごとに考える目標を出し合うことにした。この時期に音を出さずにミーティングに時間をとるのはもったいないようにも思ったが、あえてじっくりとメンタル面を統一することに時間を割くことで、演奏にも大きくプラスになると考えた。このミーティングで、3年生は以前から問題となっていた練習を休みがちなA子のことについて学年で本音を出しながら、今後どうしていくのかを涙ながらに思いをぶつけ合い話し合った。

学年別の話し合いが終わり、全員で集合し各学年で話し合ったことを発表し合い総括して、本校としてのコンクールの目標を相談した。その結果、「県大会で金賞、県代表となって東海大会へ出場する」という目標に決定し、顧問の考えと同じラインで生徒たちも目標を設定してくれた。

そしてこの日は午前で練習を打ち切り、翌日曜日の7月1日からそのミーティングの結果をもとに目標を目指して練習を開始することとなった。

以下は翌7月1日(日)の朝の様子の観察記録である。

8時の集合前に、部員が音楽室に集まりだした。楽器を組み立てている子もいる。8時になると生徒たちはパート毎にならんだ。そして、「オス」という挨拶で活動が始まった。まずは、部長・副部長が出席をとる。その後、先生から話がある。先生は「目標は、県の代表になって東海大会出場ってことで一応まとまったけど」と、話し始め、コンクールに出場するということの意義について話をした。話し終わると、「じゃあ、練習にうつる前に何か見るか」といい、一昨年橋南中が中日コンクールで県代表になったときのビデオを見ることになった。

ビデオが始まると、生徒たちは一心にビデオを見つめていた。身体を動かさずにじっと画面に食い入るように見ている。前に並んでいる2、3年生は、特に真剣だった。後ろのほうの1年生は、遅刻者が入ってきたら笑いかけたり、しゃべったりしていたが、上級生は、喋ることもなく、無言で見ている。身体でリズムを取っている子もいない。この様子から、生徒たちのコンクールにかける真剣な気持ちがかえり、上級生は何度かこのビデオを見ているということだが、「どうすれば、ビデオのなかの先輩のようになれるのか」ということが常に頭にあるのだろう。ビデオに写っているのが他の学校でもなく橋南中の自分たちの先輩だからこそ、現実味があり、身体を揺らすなどの楽しむ余裕がないくらい、ビデオを見させたのではないか。また、ビデオが終わってからも喋る生徒はほとんどいなかった。画面を見つめていたのと同じように、顔がこわばりどこかを見つめている。友達同士で目を合わせたり、しゃべったりということはほとんどなかった。

この段階で、コンクールに対する気持ちが大きく変わったように思う。自分たちがコンクールに参加するに当たり、これまで漠然と練習をしてきたのだが、この日のミーティングを通して、自分たちはこのコンクールで何を指すのかが、はっきりとした目標となって生徒たちの中に具体化した。また、欠席の多いひとりの3年生の生徒のことについても、これまで気になりながらも本音をぶつけ合う機会がなかったが、今回その件に関してもそれぞれが思いをぶつけ合い、みんなが心の中を出し合うことでお互いを認め合い、コンクールに向けてみんなで頑張ろうという方向に歩き出すことが出来た。

そしてこの日の練習後、再度前回と同じアンケートをとってみた。比較のため前回6月9日の結果を合わせて掲載してみる

問 吹奏楽部は居心地がいいと感じましたか？（6月9日）

	5	4	3	2	1
3年生（22人）	9	6	5	2	0
2年生（16人）	6	3	3	1	3
1年生（20人）	18	2	0	0	0
合計（58人）	33人	11人	8人	3人	3人

問 吹奏楽部は居心地がいいと感じましたか？（7月1日）

	5	4	3	2	1
3年生（22人）	13	7	2	0	0
2年生（12人）	3	6	2	1	0
1年生（20人）	17	1	2	0	0
合計（54人）	33人	14人	6人	1人	0人

結果の考察

今回のミーティングをしたことで、特に3年生についてはかなり不安や不満が解消され、部員の心が同じ方向を向き始めたことがわかるが、1,2年生については数字的にはそれほど変化していないようである。各自の記入理由をいくつか取り上げて見ると、

- ・5 「昨日、自分の気持ちをぶつけまくって、みんなの気持ちがわかってみんなと前よりも心が深まったから。何もかも話せる友達ばかりだから!!」(3年生)
- ・5 「青春!! 最高の感動の場所」(3年生)
- ・5 「先輩や友達と一緒にいて楽しいと思ったから」(2年生)
- ・4 「ミーティングしたあとやし、みんなの気持ちがそろい始めたのがちょっとわかったから」
(3年生)・・・前回「2」だった副部長
- ・4 「忙しいけど、充実感があるから」(2年生)
- ・3 「ふつう。たのしい」(2年生)
- ・2 「別にふつー・・・」(2年生) 前回「1」で退部しなかった生徒

(* 全員のコメントを文末に掲載した)

という具合である。みんながかなり真剣に本音をぶつけ合ったミーティングを経て、生徒間にあった不安や不満をぶつけ合って解消し、みんなで相談した結果コンクールも全員が一致して具体的な目標が持てたせいか、「3」や「2」をつけた生徒も否定的な言葉はなくなっていた。「5」から「2」までばらつきはあるものの、「楽しくない」「居心地が良くない」等の言葉は3学年を含めて誰一人書いていなかった。このことから、たくさんの部員たちの中で自分の心の奥で思ったり感じたりしていることを本音で語ることはなかなか勇気があるし、難しいことであるが、それが集団の中でできた時、そのメンバーは「雨降って地固まる」のことわざのように強い絆ができてくると言えるのではないだろうか。その結果として、吹奏楽部という場所が、前回に比べて居心地がよいと感じる生徒が増えたのだと考えられる。

8月5日(日)朝日コンクール当日

夏休みに入り三日間の合宿練習を終え、いよいよコンクール当日を迎えた。四日市市文化会館で、これまでの練習で積み重ねてきた全てをステージで出し切ろうとみんな頑張った。吹奏楽コンクールは、指導者が指揮をして生徒と一体となって演奏表現するため、生徒の演奏と同時に指揮者の音楽性も試される。つまり、指導者も審査される対象となるわけだ。生徒とともに緊張感をコントロールしながら舞台上に上り、全員が心をつなげて演

奏した。制限時間の12分が夢のように過ぎていった。今までで最高の出来だった。演奏し終わった生徒たちも舞台袖で嗚咽していた。それは、本番でのほんの小さなミスに対する悔しさであったり、それでも自分の全身全霊を12分に凝縮して表現できた感動と満足感の涙でもあった。

出演25団体の演奏が全て終わり、いよいよ結果発表の時がきた。出演順に結果が発表される。「21番、津市立橋南中学校・・・A」（聞き間違いを防ぐため、発表のアナウンスは金銀銅のかわりにABCで発表される）。会場に「キャー！」という歓喜の声が響く。念願の金賞受賞である。これまでの努力が報われる瞬間である。しかし今年度、本校の本当の目標はここからである。25校中金賞が本校を含めて5校、銀賞が18校、銅賞が2校という結果であった。そして最後に、県代表に選ばれる3校が発表される。生徒たちは皆、祈るような気持ちでアナウンスを待った。このとき筆者も生徒と全く同じ気持ちであった。しかし、残念ながら本校の名前が呼ばれることはなかった。

チーム代表として賞状を受け取り舞台から帰ってきた3年生の部長は、舞台袖で待っていた筆者の顔を見るなり、こらえていた涙が一気にあふれた。それは金賞を受賞したうれし涙ではなく、明らかに代表になれなかった悔し涙であった。それだけ真剣に目標達成を目指していたのだ。

終了後、目を真っ赤に泣きはらして集合している生徒の前で、筆者は生徒たちの健闘を称え、あと一步で目標には到達できなかったけれど、これまでのみんなの努力にこそ宝石のような価値があることを話した。そして、翌日のミーティングでは録音を聴きながら反省点を話し合い、一月後の中日コンクールに向けて今度こそ金賞、県代表を目指そうという新たな目標を全員一致で設定した。

9月16日（日）中日コンクール当日

十日あまりのお盆休みの後、夏休み後半と9月の前半を全力で中日コンクールの練習に取り組んだ。自由曲は朝日コンクールと同じ曲を演奏するが、課題曲は新たにスーザ作曲「キングコットン」に取り組んだ。中日コンクールは、これまで上級生の陰で黙々と練習をしていた1年生も副顧問の指揮で同じ日に“任意の部”に出演するため、二つのチームがそれぞれの目標に向かって頑張った²³。

9月16日（日）、当日の会場は演奏し慣れた地元津市にあるすばらしいホール「三重県文化会館大ホール」だった。“任意の部”が先に行われ、緊張しながらも立派に演奏をした1

²³ “任意の部”は、課題曲・人数制限なしで、表彰状も参加チーム全てに「奨励賞」が授与されるが、審査員の評価としてはABCをつけて講評されるため、1年生チームとしては5人の審査員の評価のうち「Cなし、出来れば一つでもA」という目標を掲げていた。“任意の部”でも本校のように1年生チームとして出場するところばかりではなく、新チームの1、2年生で出場してくる学校も多いため、審査基準が甘くなることはない。

年生の姿に、それまで何度も自分のことのように教えてきた上級生たちは感動し、演奏後ロビーに戻ってきた1年生と泣きながら健闘を称え抱き合う姿が見られた。

そしていよいよ上級生の本番である。前回の悔しさを胸に、ステージ上で精一杯の表現をした。筆者の指揮棒の先に全員目と心が集中して、正に一体感を感じた瞬間であった。演奏後、やはり多くの生徒は涙を流していたが、生徒と顔を見合わせながら内心「やった！」という手応えを感じていた。最高の演奏だった。

全ての演奏が終わり、結果が発表された。1年生チームは「奨励賞」で審査員の評価は5人とも「B」であった。1年生だけのチームとしては大健闘である。彼らの目標も見事達成された。しかし、上級生チームの結果は何と「銀賞」。参加12チーム中4チームが金賞を受賞したが、その中にさえ入ることが出来なかった。

二つのコンクールを終えて

「橋南中学校・・・B」と聞いた瞬間、部員たちの体と心が固まった。一瞬、何が起こったのかわからないような不思議な時間が流れた。声も言葉も涙も出なかった。お互いの顔を見合わせることもできず、下を向いたまま誰も動かなかった。遠くの方で結果発表の続きのアナウンスの声が響いているのが聞こえたが、何を言っているのかわからなかった。発表後、しばらくしてから部員たちの目から涙があふれてきた。朝日のコンクールで後一步のところまで代表を逃し、今度こそ代表になるぞという目標を掲げて頑張ってきて、本番では今までで一番いい演奏ができたとみんなが感じていただけに、金賞さえ受賞できないという予想外の結果を誰もがなかなか受け止めることができなかった。

3年生のある生徒の文章から

コンクールの日、「B」と言われた瞬間意味がわからなくて「？」ってなって、とりはだがブワーってなった。涙も声も出なかった。次の日、朝起きてベッドの上から窓の外を見たら森の上に太陽が光って、昨日のことはリアルやったんやーと思ったらなんか泣けた。その日は一日泣きっぱなしやった。

コンクール参加に当たってその目的は「本気で取り組んだからこそ味わえる嬉しさ、悔しさ、充実感」を心の底から味わうために参加するのだという事を強調してきたし²⁴、部員たちも筆者自身もそのことを何度も繰り返し自分に言い聞かせてきたものの、これほど悔しい結果をそうして受け入れることは容易いことではなかった。大人である筆者がそうであるのだから、中学生の部員たちにとっては想像を絶する苦しさであっただろう。しかし、悔やんでみても結果が変わることはなく、前向きに受け入れる以外に方法はない。数日後

²⁴ ◆補遺 (p64) 「コンクール参加の教育的意義」参照

のミーティングの中で、全員の努力とがんばりを称え、顧問からの言葉として、

「結果は伴わなかったけれどみんなのこれまでの努力と目標に向かって頑張ってきたこと自体が、君たちの大きな財産になる。これほど悔しい結果も、一緒に頑張ったこの仲間がいるから受け止めることができる。みんなのこれからの人生の中で、これほど悔しい経験はそうたくさんはないだろう。でもそれは、みんなが今回本当に全力で頑張ったからそう思えるのであって、全力で頑張っていない者には決して味わうことの出来ない、本当にすばらしい経験なのだ。そしてこの経験を通してみんなは、これから少々の事では動じずに乗り越えていける強い心を獲得することができるはずだ。みんなと一緒に頑張れて、先生も楽しかったし成長した。こんなすばらしい部員たちと一緒に頑張れたことを誇りに思う。」

ということを話した。そして、2週間後に地域での二つのコンサートをして3年生は引退となるため、それに向けて残りの日々を大いに楽しもうと前を向いて動き出すことができた。残酷ともいえる結果に泣き疲れていた生徒たちに、ようやく笑顔が戻ってきた。

当たり前のようにいつも一緒にいて喧嘩したり涙を流したり、それでも同じ目標に向かって頑張ったりできる「友達」「仲間」がいる。この吹奏楽部という空間が彼らにとってこの時点でどのような存在であったらう。

以下はその日のアンケート結果である。比較のため、1回目（6月9日）と2回目（7月1日）の結果と合わせて掲載する

	た とても感じ た	ま あまあ感 じた	感 じた	あ ま り 感 じ な か つ た	か つ た	全 く 感 じ な か つ た
吹奏楽部は居心地がよいと感じましたか？	5	4	3	2	1	

回答結果（第1回目 6月9日）

	5	4	3	2	1
3年生（22人）	9	6	5	2	0
2年生（16人）	6	3	3	1	3
1年生（20人）	18	2	0	0	0
合計（58人）	33人	11人	8人	3人	3人

回答結果（第2回目 7月1日）

	5	4	3	2	1
3年生（22人）	13	7	2	0	0
2年生（12人）	3	6	2	1	0
1年生（20人）	17	1	2	0	0
合計（54人）	33人	14人	6人	1人	0人

回答結果（第3回目 9月23日）

	5	4	3	2	1
3年生（23人）	20	1	2	0	0
2年生（13人）	6	3	3	1	0
1年生（22人）	20	2	0	0	0
合計（58人）	46人	6人	5人	1人	0

結果の考察

第1回目から、5または4をつけた生徒の割合を比較すると、1回目が75.9%、2回目が87.0%、第3回目が90.0%という結果になった。第3回目の生徒のコメントをいくつか挙げてみる。

- ・5 「3年生は特に、1年生の時からずっと同じ想いで頑張ってきて、話し合いとかも何でも本音で言い合ってきたから、すごく居心地が良かったです」（これまでのアンケートで2→4と変わってきた3年生副部長）
- ・5 「1日のうちの大部分を吹奏楽部にいて、自分の家のような感じがしているから」（3年生）
- ・5 「一番安心できて、自己表現ができる。笑える」（3年生）
- ・5 「嬉しいときにはみんなで喜べて、悲しいときにはみんなで泣けるから」（2年生）
- ・4 「先輩が仲良くしてくれて、たまに怒られたり、褒められたりしてもらったから」（2年生）
- ・3 「みんなと居ると楽しいから」（1回目で「1」をつけたけど辞めなかった2年生）
- ・2 「最近もめごとが多いし」（2年生）²⁵

(* 全員のコメントを文末に掲載した)

²⁵ この「2」は、コンクールを終え、次のコンサートの練習をする中で、パート内で新たなもめごとが起こっているときにアンケートをとったため、その気持ちを記入したもの。

6月から考えると、まだ目標もバラバラなまま漠然と頑張りたいと思っていたコンクールに対し、徐々に練習を重ねて音楽が出来上がっていくにつれて部員の心も1つになり始め、具体的な目標を設定することでさらにその意識も高まり、もめごとや課題を1つ1つ解決していきながら自分たちの全力で最高の演奏を目指して練習に取り組んできた。そして時期に合わせて具体的な目標を設定していく中で生徒の意欲も増大し、みんなで一つの音楽を作ることを全力で目指して努力することが出来た。

その結果としては、残念ながら目指していた目標には到達できなかったけれども、本年度の橋南中学校吹奏楽部のこのような活動を通して、部員たちがこの吹奏楽部という空間を居心地の良い場所として感じるようになり、さらにそこで演奏する音楽を通して自分たちの心をその音楽にぶつけてきた。そして、このようなたくさんの貴重な経験を通して一人一人が大きく成長して2週間後、3年生は引退の日を迎えた。

第4節 吹奏楽部とコンテナ

これまでの三回のアンケートで、「吹奏楽部は居心地がいいと感じましたか」という質問をした。そして、コンクールに向けた練習が進み、音楽が徐々に出来上がり、トラブルも乗り越え、目指す目標も具体的になっていくにしたがって、“居心地がいい”と答える生徒の割合が増えていった。

ところで、人はどんなときに「居心地がいい」と感じるのだろうか。9月のアンケートで生徒が書いた言葉をみると、「何でも本音で言い合ってきたから」「自分の家のような感じがしているから」「安心・自己表現が出来る・笑える」「みんなで喜べて、みんなで笑える」等が挙げられる。つまり、その場に居ることで「ありのままの自分で居ることが出来る」というような感覚が持てたとき、“居心地がいい”と感じるのではないだろうか。

筆者は、吹奏楽部というクラブ活動の「場」には二つの側面があると考えている。学校の中にある吹奏楽部という枠の中で、生徒たちが毎日そこへやってきてありのままの自分を出し、そこでは部員間や、先輩後輩の人間関係のトラブルなどもたくさん起こってくるし、そのたびに喧嘩したり仲直りしたりということが繰り返される。みんなで気持ちを一つにしてコンクール等に取り組み、その過程での苦しみや結果の喜びや悔しさを共有する。その様子を、顧問である教師がいつもそばにいて見守り、必要に応じて話を聞いて共感したり指導したりしながら問題解決の手助けをすることで、そのような様々な不安要素を安心に変えて生徒に返す。第一の側面は本論文の第2章で述べた「学校または教師としてのコンテナ」という側面である。これは、吹奏楽部に限らず、他の全てのクラブ活動での顧問と部員間や、各クラスでの担任と生徒との関係性でも同じことが言える。

また、吹奏楽部は言うまでもなく「音楽」と向き合う活動である。楽器演奏を通して、より美しく感動的な音楽を作ろうと日々努力をする中で、自分たちが向き合っている「音

楽」そのものの中に、自分の中にある様々な思いを投影し、その曲を聴いたり演奏したりすることで無意識のうちに癒やされていく。第二の側面はつまり、本論文第 3 章で述べた「音楽のもつコンテイナー」が機能するという側面である。

吹奏楽部では、そのような二つの「コンテイナー」に包まれて安心して「ありのままの自分で居る」ことができるはずなのである。吹奏楽部顧問として生徒に関わる際には、このような視点を持ちながら生徒を見守りながら音楽指導を進め、この二つの要素がコンテイナーとして全ての生徒に十分に機能するように配慮していくことが大切だと考える。

終 章 ～成果と課題～

これまでの筆者の教師経験をもとに、第1章と第2章で Bion の「コンテイナー機能」という概念が、母親と赤ん坊という枠を超えて、学校(教師)と生徒との間に応用することの効用を述べてきた。さらに第3章ではその機能が「音楽」と人との間にも当てはまるという考えを述べ、それを活用することでより効果的に音楽教育を進める方法を考察した。

筆者のそれらの考え方を実際の指導現場でどのように活かしていけるのかを、第4章で実際の筆者の指導例として吹奏楽部の指導の記録を記述した。

吹奏楽部における教師と生徒の関係性において、筆者は顧問としてただ単に演奏曲を指導するだけではなく、吹奏楽部という集団の中で一人一人が持つ不安や不満に目を向け、それらを同じ目標を持つ仲間の中で出し合う指導をした。個々に顧問(筆者)に訴えてくる不安や不満を、喧嘩してでもいいからみんなの前で出し合う場をミーティングという形で持たせた。そこでは、ふだん心で思っているでもトラブルを恐れて言葉にして言いにくいような本音を出させるよう心がけた。自分の気持ちを言葉にして伝えるのが苦手な生徒には、ミーティングの中でその子の立場に立って「〇〇さんは・・・という気持ちなんと違うかな？」という風に筆者が代弁して周囲に「なるほど」と気づかせるようにした。そうすることで、吹奏楽部という集団がうわべだけの関係でなく、何でも本音でぶつかることの出来る仲間がいる安心の場として存在出来ると考えたからである。そして発言力のある子もそうでない子も、全ての立場の仲間の気持ちを理解した上で、全体としてどの方向へ進んでいくのかということ論議させるよう心がけた。

第4章でコンクールの目標を設定する話し合いの中では、目標以前にみんなのやる気がバラバラなことが問題となり、特に塾で欠席がちな3年生の部員に対する不満や、その本人の複雑な気持ちをみんなの前で吐き出すことが出来た。その結果、「自分の気持ちをぶつけまくって、みんなの気持ちがわかってみんなと前よりも心が深まった。何もかも話せる友達ばかり！！(7月1日3年生)」という感想を引き出すことが出来た。

顧問教師として、そのように本音で話し合うことの大切さを教えながら、全ての立場の生徒の気持ちをまずは無条件で受け入れ、言葉にして生徒に返すことで、そこから生徒は自分から新しい答えを見つけていく。教師としてこの関わり方はほんの一例であるが、「コンテイナー」としての役割を意識したこのような関係性は、生徒に安心を与え、自立を引き出すことにつながると言える。筆者はここに、学校(教師)としての「コンテイナー機能」の効用を見出すことが出来ると思う。

また、最終的にコンクールの結果はこれ以上ないほどの悔しさと無念さで終わってしまったにもかかわらず、生徒たちがこのクラブは居心地が良いと答えた理由として、「素の自分が出せるし、すっごくみんなのことを信頼できる仲間たちばかりだから(3年)」「嬉しいときにはみんな喜んで、悲しいときにはみんな泣けるから(2年)」というコメントに

見られるように、クラブ活動を通して、結果にかかわらず一人一人の心が立派に成長していることがうかがえる。このことから、中学校における吹奏楽部というクラブ活動が、基本的信頼のおける場であり、そこに身を置いて活動に励むことで安心を得られている様子がうかがえる。このことも、学校がコンテナーとして機能していることの実例だと筆者は考えている。

また、「音楽指導における情動調律」の節で述べたように、生徒のありのままの演奏を指導者がいったん受け入れ、演奏においても生徒の目線に降りて一緒に考え、一步一步進んでいくなかで、生徒はやがて自分自身の演奏として音楽的に高度な表現を獲得出来た。このことも、指導者が音楽指導においても「コンテナー」としての機能を果たすことで、より効果的に指導できた例として捉えることが出来ると考える。

しかしながら、今回の実践からいくつかの課題も見えてきた。

その一つは、6月の段階で「何にも楽しいと思わない。練習きつくて・・・頑張れそうな気がしません。あと、みんなと仲良くできない。(2年)」と書いた生徒ら数名がコンクールを前にクラブを辞めてしまったことである。結論から言うと、教師(顧問)としてその子たちを筆者のコンテナーに包み込むことが出来なかったということだ。多くの部員たちが居心地良く感じている中でも、この生徒のように活動を楽しめない生徒も実在する。顧問としてその子たちに対してすべき最も必要な指導とはどのようなものであったのか、考えていかなければならない。筆者の主張してきた「中学校におけるコンテナー機能」は、かなり効果的に活用できていると考えているが、しかし決してそれだけで万能な概念ではないことも明らかになったといえる。

二つ目は、音楽指導についてである。指導者としてコンクールに臨むからには当然良い結果がほしい。しかし、20年の指導経験の上に「コンテナー機能」の概念を念頭に置き筆者なりに精一杯指導したが、その結果はまだまだ満足のものではない。同じように顧問として結果を出している多くの指導者たちから学ぶべき点がたくさんある。コンクールでは、今回のように悔しい結果に終わっても生徒の心の成長という面では多くのプラス面があることは間違いないが、やはり努力の成果が結果に結びつくことで、生徒たちの自信や満足にもつながるし、努力することの価値をわかりやすく体感することが出来る。そういう面で、筆者は吹奏楽指導者として、まだまだ多くのことを学ばなければならない。生徒が素晴らしい演奏をするには、健全な心の指導が最も大切であるが、それだけでは多くの聴衆を感動させることは出来ない。筆者は、生徒が心地よく演奏活動をする中で、その成果として多くの聴衆が涙を流すほど美しく感動的な演奏を目指したいと考えて指導している。音楽科教師として吹奏楽部の顧問をするからには、やはりそこを目指し続けて努力を怠ってはならないだろう。これはゴールのないレースでもあるが、まだまだ自分の前には目標とすべきたくさんランナーがいることは間違いない。

終わりに

筆者が教師という仕事に就いて20年あまり、考えてみるとすでに7～8千人という生徒と関わってきたことになる。その都度、目の前の生徒に対して教師として何が出来るだろうと精一杯考えて教育実践してきたつもりではあるが、うまくいかなかったり、生徒のためと思って行動したことが逆効果であったりして、数々の失敗を経験してきた。当然のことながらそこには、自分の言葉を素直に受け入れてくれる生徒ばかりではなく、これまで出会ったことのないようなものの考え方をする生徒や保護者に出会って困惑したり、目の前で泣いたりわめいたり興奮したりする生徒が、何の理由でそうするのか全くわからないで、どう指導したらいいのかわからず途方に暮れたこともあった。

そのような経験の積み重ねの中から、まるで母親が赤ん坊に対して接しているかのように筆者自身が生徒に対して母親のように接していったとき、予想以上に生徒の心が素直になり、こちらの言葉に耳を傾けるようになることを実感してきた。それは、生徒と向き合うときの具体的方法だけでなく、そのときに教師が生徒をどのように見つめるかという教師の心の持ち方においても同様で、好ましい母子関係に必要ないくつかの視点を教師が生徒に対して持つことで、それが大変有効に機能していると考えた。しかし、それらは常に教育現場でその場その場の直観で行動してきたことであって、なぜそうなるのか、それは普遍的な事実として言えるのかという疑問に関しては、裏付けのないものであった。

本論文を執筆するに当たって、このように筆者が教師経験の中から直観的に感じてきたことを言葉や文章にまとめ、先行研究等と照らし合わせて自分の実践を整理していく中で、Bionの「コンテイナー機能」という概念に出会うことが出来、直観的に感じていただけのものを文章にし、論文としてまとめることが出来た。本論文を通して、筆者の見解が今後の教育研究に少しでも貢献できれば幸いである。

末筆ながら、論文執筆に不慣れな筆者に対し根気よくご指導いただいた根津知佳子先生はじめ、多くの助言をいただいた三重大学教育学部音楽科の先生方、筆者が大学院で研究することに御理解・御協力そして応援までしていただいた津市立橋南中学校の職員・生徒の皆さん、一緒に励まし合ってきた大学院生の仲間たち、そして支えてくれた筆者の家族に感謝の意を表します。

資 料 (1)

橋南中学校吹奏楽部のコンクール参加の記録 (三重県大会)

		編 成	自 由 曲	朝 日	中 日
1997	H.9	大	ハンガリー狂詩曲第2番	銀	***
1998	H.10	大	大草原の歌	銀	銀
1999	H.11	大	フェスティーボ	銀	銀
2000	H.12	大	飛鳥	銀	金
2001	H.13	大	フィンランディア	銀	銀
2002	H.14	小	吹奏楽のためのパッサカリア	銀	銀
2003	H.15	大	ハンガリー狂詩曲第2番	銀	銀
2004	H.16	大	「メリーウィドウ」セレクション	金	金
2005	H.17	大	「小鳥売り」セレクション	金	金(代表)
2006	H.18	大	「微笑みの国」セレクション	銀	金
2007	H.19	大	「こうもり」セレクション		

資料(2)

6月9日のアンケートの生徒のコメント

	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しいし集中できるし毎日が輝いているから ・吹いていて楽しいし、上手になっていくのがわかるから。 ・部活で疲れても楽しいと思えたから ・嫌なこともいろいろあるけど、吹奏楽部のみんなとしゃべったり、みんなで吹いて1つになったときの感動が好きだから。部活にぼつとうする。 ・みんなで1つのものを作っていったり、協力してやっていくのが好きだし、みんな良い子やし、おもしろいから。 ・みんなといて吹いて楽しいから。 ・やってて楽しいからです。 ・音楽が好きだから。上下関係があまりないから。 ・音楽が好きだし、色んなジャンルの音楽にも向き合えるから。(違う答えになってるけど・・・汗)皆元気だし、やりにくいところなんて1つもないから。
5	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが思ったことをちゃんと言い合って仲がいいからだと思います。 ・楽しいからだと思います ・みんなと楽しく過ごせるから。吹いていて楽しいから！ ・先輩後輩の関係はしっかりあるけどみんな仲良いから。 ・先輩には普段は優しくしてもらって真剣なときは真剣になれる雰囲気になるから、気持ちにメリハリがつくから。あと、途中から入部したけど、あたたかく迎えてもらえた気がするから。 ・みんなの吹いている音とかが合奏とかで合ってくのが楽しいから。
	1年	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが仲良いし、先輩も優しいから・・・ ・吹奏楽はすごくおもしろいし楽しいし、みんながすごく優しいので居心地がいいと思いました。 ・先輩の人たちがいいところはよかったと伝えてくれて、よくない所はダメと伝えてくれ、ここにいて(がんばれば)うまくなれるカナと思えた。 ・吹奏楽部で音楽を聴いていると落ち着く。そういうことで居心地イナーと思いました！ ・先パイが優しいし、直した方がいいとこや、アドバイスをはっきり書いてくれるし、なにより楽器を吹いているのが楽しい。 ・今まで先輩たちとあまり話をする機会がなくて、最近いろんなことを話せたので。まわりの人とも話せた。

		<ul style="list-style-type: none"> ・先輩や周りのみんながとっても明るいから。 ・先生や先輩たちが、優しく教えてくれるから。Fgは先輩がいないけど、他の先輩がわからないところを教えてくれるし、先輩たちの演奏が上手であこがれるから。 ・練習はきついけど、悪いところなんかは先輩が言ってくれるし、それを直せるのがうれしい。 ・せんぱいがた、先生、きびしいけど優しく教えてくれるから。 ・みんな優しいから ・練習がすごく楽しいからです ・先輩たちがすごくやさしい。曲で自分のだめなところをゆってくれる。 ・みんな優しく教えてくれるから。楽しくできそう。 ・先輩たちはとってもおもしろいし、優しいけどあかんところはちゃんと教えてくれるし、先輩たちの輪の中にもすっごい入りやすかった。間違えても別に悪い雰囲気にはならないのがいい。 ・優しい先輩たちがいて、1年ができなかったら怒りながらアドバイスをくれて(多分)1年のことを思ってくれているから!? ・先輩たちがほめてくれたり怒ってくれたり注意してくれたり、自分たちのことを思って言ってくれたりしてすごくいいです。 ・先輩と後輩の仲がとっても良いから居心地がいいと思います!あと、激しく、しっかり、楽しく教えてくれるところがうれしいです。
4	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・みんな優しいし楽しいから ・楽しいし仲間?がいるから。 ・コンクールに向けて、みんな頑張っているから、今のところ居心地がいいです。 ・みんないい人だし楽しいけど、男子が少ないから。1年生の男子があまり好きではないから。 ・友達。楽器弾くの楽しい。 ・みんなと一緒にいたほうが楽しいし、練習がはかどる。協力し合うことで、お互いを高めていけるから。
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・練習のときは一生懸命にやるけど、休みは大はしゃぎであそべるから! ・私はこの学校に4月に転校してきたばかりで、普通の学校生活はクラスの人に圧倒されてあまり楽しいと思うときがないけど、部活で先輩とかと一緒にいるほうが楽しいと思ったから。 ・先輩後輩が仲がよくて、時には注意されたり怒られたりするけど、それが成長にもなるから。
	1年	<ul style="list-style-type: none"> ・思っていたよりも楽しい。でも嫌なこともたくさんあるのであえて「4」です。 ・先輩優しい。友達おる。

3	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽は楽しいけど人間関係があまりうまくいってない。 ・ぶつかることが今日あったけど、自分の家のように感じるから。 ・友達と気軽にしゃべれるし、何でも言い合える。 ・友人がいるから。
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・まだ自分が先輩という立場になって時間が少ないし、しっかりしていない部分があって、部活以外の好きなこととの両立の不安があり、まだ不安定です。先輩が自分をどう思っているかも不安です。 ・楽しいけどうまく吹けないから。 ・みんながコンクールに向けて集中しているから、自分ももっと頑張ろうと思うから。
	1年	
2	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなのやる気に差があるから。 ・楽器を吹くのは好きだから楽しいけど・・・部活だと思えると憂鬱な気分になる。なかなかパートもうまくいかへんしなんか嫌なことのほうが多い。 ・楽しいけど緊張ばっかしている。
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇ちゃんとギクシャクする。
	1年	
1	3年	
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・何にも楽しいと思わない。練習きつくて・・・頑張れそうな気がしません。あと、仲良くできない。(みんなと) ・けんかが多いし、なんか居心地はない。 ・グロッケン久しぶりにやったから。居心地なんてもんじゃない。
	1年	

資料 (3)

7月1日アンケートの生徒のコメント

5	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 吹奏楽部は楽しいです ・ 楽しいから ・ 自分らしく過ごせるから ・ すごく練習しやすいし、だんだん気持ちがひとつになってきた気がしたから ・ 昨日、自分の気持ちをぶつけまくって、みんなの気持ちがわかってみんなと前よりも心が深まったから。何もかも話せる友達ばかりだから！！ ・ 青春！！最高の感動の場所 ・ 楽しいから。なんか落ち着く。 ・ コンクールに向けての夢がふくらんできたから ・ なんかいい！おもしろい。相談できる友達がいっぱいおる！ ・ みんなと楽しく吹いて、時には言い合いをしていたとき ・ 楽しいから ・ 楽しいから ・ これもミーティングの話からになるけど、合奏して、皆が団結してきているのがすごくわかってきて本当に嬉しかったから！もっと居心地がいいなと思ったし、音楽が大好きになった
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先輩や友達と一緒にいて楽しいと思ったから ・ みんな仲が良い！！ ・ なんか、演奏中の音楽とか、メトの音がなんか、ここちよかった
	1年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 合奏がとっても楽しいからです！ ・ 色々楽しい！これからもやりたい！！ ・ みんなが仲いいから ・ みんなといて楽しいし練習も楽しい ・ 先輩 (OB) はやさしかったし、先生もオモシロくって居心地が良かったです ・ やっぱりみんなが一致団結して演奏していたので、とても楽しくなってそう思いました ・ みんなが優しく、くわしくわからないところを教えてくれるから ・ 先輩たちは、いつものように優しく教えてくれたこと ・ もめごとなく仲良くできるから ・ みんなが真剣に音を出して練習しているからがんばれると思うから

		<ul style="list-style-type: none"> ・ みんなでやって悪いところも直してくれるから ・ 先輩とかがやさしいから ・ みんなが仲良くてとても吹きやすいから ・ 先輩たちはこわいけど、ちゃんと教えてくれるトキは教えてくれるけど、民話の途中から教えてもらってないから ・ 楽しいし友達おるから ・ 卒業した先輩が色々教えてくれた！竹内先生も先輩も教え方が優しくていいです ・ すごく楽しいからです
4	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しいから ・ ミーティングしたあとやし、みんなの気持ちがそろい始めたのとかちょっとわかったから ・ 最近パートが仲良くなったから ・ 楽しいから ・ 楽しいのは楽しいけど、怖い人もおるからちょっとイヤ。。 ・ わからないけどなんとなく ・ 友達のおかげ。
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲もよくて、一生懸命だからです ・ みんなすごいうまいから手本？になる。楽しい！ ・ たのしいから ・ 楽しいし、けんかとかもないから ・ 忙しいけど、充実感があるから
	1年	<ul style="list-style-type: none"> ・ みんなと楽しく練習できるから
3	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・ いつもどおりだから ・ なんとなくそんな風に思ったから
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふつう。たのしい ・ 今まで休んでいた子が昨日から戻ってきたけど、みんなあたたかく受け入れていたから
	1年	<ul style="list-style-type: none"> ・ もめごとがないから ・ 全部（合奏・パー練トカ）がたのしいから
2	3年	
	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 別にふつー・・・
	1年	
1	3年	
	2年	
	1年	

資料(4)

9月23日アンケートの生徒のコメント

3年	5	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと楽しく曲を吹いたりするときになんかホッとするような感じだから。 ・みんなやさしくておもしろくて楽しいから ・3年生は特に、1年生の時からずっと同じ想いで頑張ってきて、話し合いとかも何でも本音で言い合ってきたから、すごく居心地が良かったです ・ずっと一緒にいるメンバーと楽しく頑張れるものだから ・仲間がいるから ・やっぱり練習はつらいけど、それを頑張ることで得られることはすごく多いと思うし、吹奏楽をやっているととても楽しいと思えるから。音楽で人を楽しくさせたり、悲しくさせたり、感動させたりできるのはすごいと思う ・一番安心できて、自己表現ができる。笑える ・1日のうちの大部分を吹奏楽部にいて、自分の家のような感じがしているから ・素の自分が出せるし、すごくみんなのことを信頼できる仲間たちばかりだから ・3年間いろんな事があって、音楽を通してすごくいろいろ成長したと思うから。信頼関係があるから ・楽しいし、みんなとおる日がほとんどだから ・3年間ずっと一緒に頑張ってきた仲間が居るから ・このメンバーと先生みんなが最高やから！ ・みんなおもしろくてよい子たちばかりだから。 ・すごくチームワークが感じられるし、いると楽しくなる ・全体的に皆仲がいいから ・よくわからないけどいやじゃないから ・みんないい人です ・本気でぶつかれる友達がおるから ・感じた。なんだかんだあったけど、皆一人一人が助け合ってきた3年間だったし、欠点があっても、それを皆で直していこうとする意欲がたわったりしてたし・・・。とにかく居心地がよかった。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなとけっこう仲が良いから
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもと同じだから ・雰囲気がよかったから

2年	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 過ごしやすいから？ ・ みんな仲いいから？ ・ 部活していて楽しいから ・ バンド全員が気持ちを1つにして同じ思いで練習、本番に臨んだのでコンクール時は居心地が良かったと感じる ・ 嬉しいときにはみんな嬉べて、悲しいときにはみんな泣けるから ・ コンクールが終わってみんな心で1つにして演奏したこととか
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しいから ・ 先輩が仲良くしてくれて、たまに怒られたり、褒められたりしてもらったから ・ 感じることもあったけれど、たまには先輩と口論するときがある
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ わからない ・ みんなといて楽しいから ・ みんなと居ると楽しいから
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最近もめごとが多いし
1年	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しいから ・ けんかをして仲直りをしてまた元通りに仲良くできるから ・ いつでも助け合って乗り越えてきたから ・ みんなになじめてきたから ・ みんなやさしい。はげましてくれる ・ 先輩が一生懸命教えてくれた ・ 先輩たちがやさしく教えてくれるから ・ 励まし合えたりとかするし、みんなと演奏しとって楽しいから ・ 先輩たち（上級生チーム）に励まされて応援されて嬉しかったから ・ 楽しいし楽器が好きだから ・ 演奏が終わったとき、先輩たちも迎えてくれて、嬉しかったから ・ みんなと目標が達成できて嬉しかったから ・ これからも続けたいと思える。みんな頑張れるような感じ ・ みんなで助け合ってるから ・ 先輩がやさしい ・ 先輩たちがやさしいから ・ 先輩たちがやさしいし、いろんな事を知れたりするから ・ たのしい ・ (コンクールの演奏) やったあと泣いているときに、先輩がやさしくなぐさめてくれた ・ 練習めっちゃ楽しい
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・ パートのみんながいるから

		<p>・へたでも元気の出るような声をかけてくれる。みんなで合奏するときにすごく楽しい。</p>
--	--	---

補 遺

コンクール参加の教育的意義について

吹奏楽コンクールに参加するに当たって、その目的と意義について全部員と顧問が共通理解が出来ていることは大変重要なことであると考えている。そこで、第4章で記述したコンクールに向けての練習記録の補章として筆者なりの考えをこの章で述べる。

筆者自身も、中学、高校、大学と吹奏楽部に所属し、トランペット奏者として毎年のように吹奏楽コンクールに参加してきた。教師になってからもずっと顧問として、また指導者・指揮者としてコンクールに参加してきた。そのおかげで自分の吹奏楽指導に対し多くの課題を見つけることができたし、参加するたびに音楽的な面でも自分自身の音楽性を見直し、反省する機会を与えてもらっている。生徒たちにとっても、コンクールがあるからこそ、夢中になってひとつひとつの音を追求する練習ができると思う。

日本の吹奏楽がここまで盛んになったことは、吹奏楽コンクールの存在抜きには語れないだろう。しかし、コンクールのように、音楽というもので他人と競うことに否定的な考えを持つ人もいる。コンクールに出場するからには、顧問も生徒も「何のためにコンクールに出場するのか」という根本的で大切なことに対し、しっかりと話し合いの上で共通理解を持って臨むことが大変重要であると考えている。「金賞とれたらそれでよし。とれなかったら意味がない。」というような気持ちでコンクールに臨むのであれば、特に学校吹奏楽の場合それは教育的配慮に欠けていると指摘されても仕方ないだろう。学校吹奏楽はあくまで生徒たちの健全な心の育成が第一の目標であるはずで、勝負に勝つことだけを目標にしたとき、生徒の心は歪んでしまう。例えば「勝つこと以外に価値がない、あるいは勝つために手段を選ばない」というような勝利至上主義の考えに陥ってしまえば、教育活動としては明らかに誤りであるといっても過言ではない。しかし、だからといって、「参加することに意義があるのだから、賞にはこだわらない」というような安易な気持ちでコンクールに臨むのも正しい参加の考え方だとは思えない。

これに関して、西田治²⁶（2006）は次のように述べている。（下線は筆者による）

私はコンクールを「競技の場」として改めて捉え直す必要性を感じている。「競技の場」というからには競技スポーツにおける試合と同様に勝つ事を目標とする。禁欲的にならずに勝ちたいという自然の欲求を受け入れ、勝つために努力する。そこに音楽で競うことの罪悪

²⁶学校吹奏楽におけるコンクール参加の意義～スポーツ・コーチングからの考察～
西田治（音楽教育実践ジャーナル vol.3 no.2 2006）

感を持ち込む必要は無い。「音楽はもともと競うものではない」という意見がある。もちろん音楽はそういう面も持ち合わせているだろうが、コンクールという「競技の場」に出るならば、勝つことを目標に努力していく事が必要だと考える。「勝利を目指すことの価値」と「勝利にしか価値がないとする考え方」の違い (A) さえ注意すれば、コンクールは「競技の場」として有効に機能し、チームの実力を上げるよい機会となる。

またその一方で、あくまでもコンクールはひとつの場にすぎないという認識も必要だろう。音楽を演奏する場はひとつではない。コンクールという音楽で競う場もあれば、文化祭のステージのように楽しむこと・楽しませることを目的とする場もある。場に応じて演奏する意味や意義を捉えられることも非常に重要であると考え。(pp.94~95)

ここで注意しなければならないことは、下線 (A) の「勝利を目指すことの価値」と「勝利にしか価値がないとする考え方」についてである。ともすれば指導者自身がこのことをはき違えてしまい、生徒に誤った価値観で指導してしまうことにつながるからである。せっかくの音楽教育の場であるのにも関わらず、「頑張って練習したのに勝負に負けた」という敗北感だけが残り、結果的に生徒を音楽嫌いにさせてしまう可能性もある。

しかしまた、そのように思って指導していても、思うような結果が得られなかった場合指導者自身も生徒と同じように、あるいはそれ以上に悔しい思いをするものである。筆者もこれまで、指導者としてコンクールに臨み、自分も生徒も精一杯頑張ったのに思う通りの賞がもらえない年が多く、生徒とともに悔し涙を流し、そのたびに「自分も生徒も何のために頑張ってきたのだろう」と頭を抱えてきた経験を持つ。でもその「何のためにコンクールに出るのか」ということは、結果が出てから考えるのではなく、コンクールに参加するかどうかを決める時点で、生徒とともに十分に話し合っておく必要があるのだ。このことについても西田は自身の指導経験から次のように述べている。(下線は筆者による)

今私は、「自分たちは勝ち負けにはこだわっていない。出場することに意味があるのだ。」というような意見に出会ったときには、そこに「逃げの姿勢」が無いかどうかを注意深く観察することになっている。逃げの姿勢のないものは良い。しかし、逃げの姿勢を持った「参加することに意義がある」というような発言は、脆弱な自己防衛に使われるため注意が必要だ。「勝負にこだわらない」というどこか力を抜いて参加しているように見せるのは、結果が出た時に自分たちが傷つくこと、悔しい思いをすることを避けるための口実かもしれない。しかし、本気で取り組んだからこそ味わえる嬉しさ、悔しさ、充実感 (B) それこそ大切だと私は考える。だからこそ勝負から逃げずに真剣に取り組む姿勢・プロセスこそが大切だと思うのだ。(p.96)

勝つことを目指し参加する以上、思うような結果が出ないときには指導者も生徒も虚無感に陥りやすい。しかし、視点を変え、どれだけ成長したか、何を得たか、つまずきは何か、と内側のモノサシに目を向け振り返ることで、コンクール参加が充実した経験として心に残

るようになり、そこで得た悔しさは後ろ向きの負のエネルギーから次へと向かう正のエネルギーへと変わっていくものと考え。ここから、コンクール参加においては、参加までの課程のみならず、結果後の事後指導も非常に重要になってくるといえる。(p 95)

勝つことを目指して、下線 (B)にある「本気で取り組んだからこそ味わえる嬉しさ、悔しさ、充実感」を心の底から味わうために参加するのだということを、部員全員に徹底して共通理解するとともに、指導者である顧問自身がしっかりとそのことを心に据えて取り組むことが何より大切である。吹奏楽部という集団のなかで顧問と部員たちがコンクールに出る目的をとことん話し合い、特に、結果が出たあとの事後指導の中で反省点を出し合い、生徒たちの成長を顧問が言葉にして十分にそれを認め、努力をたたえ、さらに次へと向かうための課題を指摘していくことが大切だと考える。そのような顧問と部員の本音を出し合える人間関係の中で、生徒たちは安心感を得、厳しくても充実感を感じ、頑張る力を勝ち取り、吹奏楽部そのものを居心地の良い場所と感じるようになるのではないだろうか。

平成 19 年度コンクールに参加するに当たって、その目的として以上のように生徒と共通理解をした上で指導がスタートした。

参考文献

- ・『ライフサイクルの臨床心理学』馬場禮子・永井徹 共編 培風館（1997）
- ・『経験から学ぶこと』 原著名『**Learning from Experience**』Wilfred Bion（1962）
『精神分析の方法Ⅰ』より「経験から学ぶこと」福本修訳 法政大学出版局（1999）
- ・『本気の教育でなければ子どもは変わらない』 原田隆史著 旺文社（2003）
- ・『五感ではぐくむ子どものこころ』岩倉政城著 かもがわ出版（2006）
- ・『対象関係論を学ぶ クライン派精神分析入門』松本邦裕著 岩崎学術出版社（1996）
- ・『音楽療法における母子相互関係の臨床的応用』松山久美 日本臨床心理研究所発行「音楽療法」第8号別刷（1998）
- ・『音楽療法の基礎』村井靖児著 音楽之友社（1995）
- ・『音楽的場と「臨床の知」』根津知佳子 感性哲学4, 東進堂（2004）
- ・『学校吹奏楽におけるコンクール参加の意義～スポーツ・コーチングからの考察～』
西田治 音楽教育実践ジャーナル vol.3 No2（2006）
- ・『親－乳幼児心理療法：母性のコンステレーション』Stern, Daaniel N./馬場禮子、青木紀久代訳 岩崎学術出版社（2000）.原著名『**The motherhood constellation : a unified of parent-infant psychotherapy**』